

宮崎県文化財調査報告書

第 23 集

昭和56年3月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 23 集

昭和56年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては、文化財指定のための調査、また、開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は、高千穂町の横穴墓群、佐土原町の横穴墓群、須木村、高原町の各地下式古墳群、三股町の製鉄関連遺跡の5件を報告するものであります。

本書は、本県の歴史解明のための学術資料として研究に活用していただくとともに、社会教育・学校教育の資料として役立てていただきたいと存じます。

なお、調査にあたり御協力いただいた地元の方々、種々御配慮いただいた地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和56年3月31日

宮崎県教育委員会

教育長 四 本 茂

例　　言

1. この報告書は、宮崎県教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であるが、高千穂町南平横穴墓群と、高原町日守地下式古墳55-1号～4号については、地元教育委員会において調査されたもので、依頼により掲載し、また佐土原町土器田横穴墓群についても、佐土原町開発公社の依頼により掲載するものである。
2. 掲載しているのは、地下式古墳2、横穴墓2、中世の遺跡1の合計5件についてである。
3. 本書の編集は、宮崎県教育庁文化課が担当し、県文化財保護審議会委員石川恒太郎が監修した。
4. なお、執筆分担者名は、本文目次に明記した。

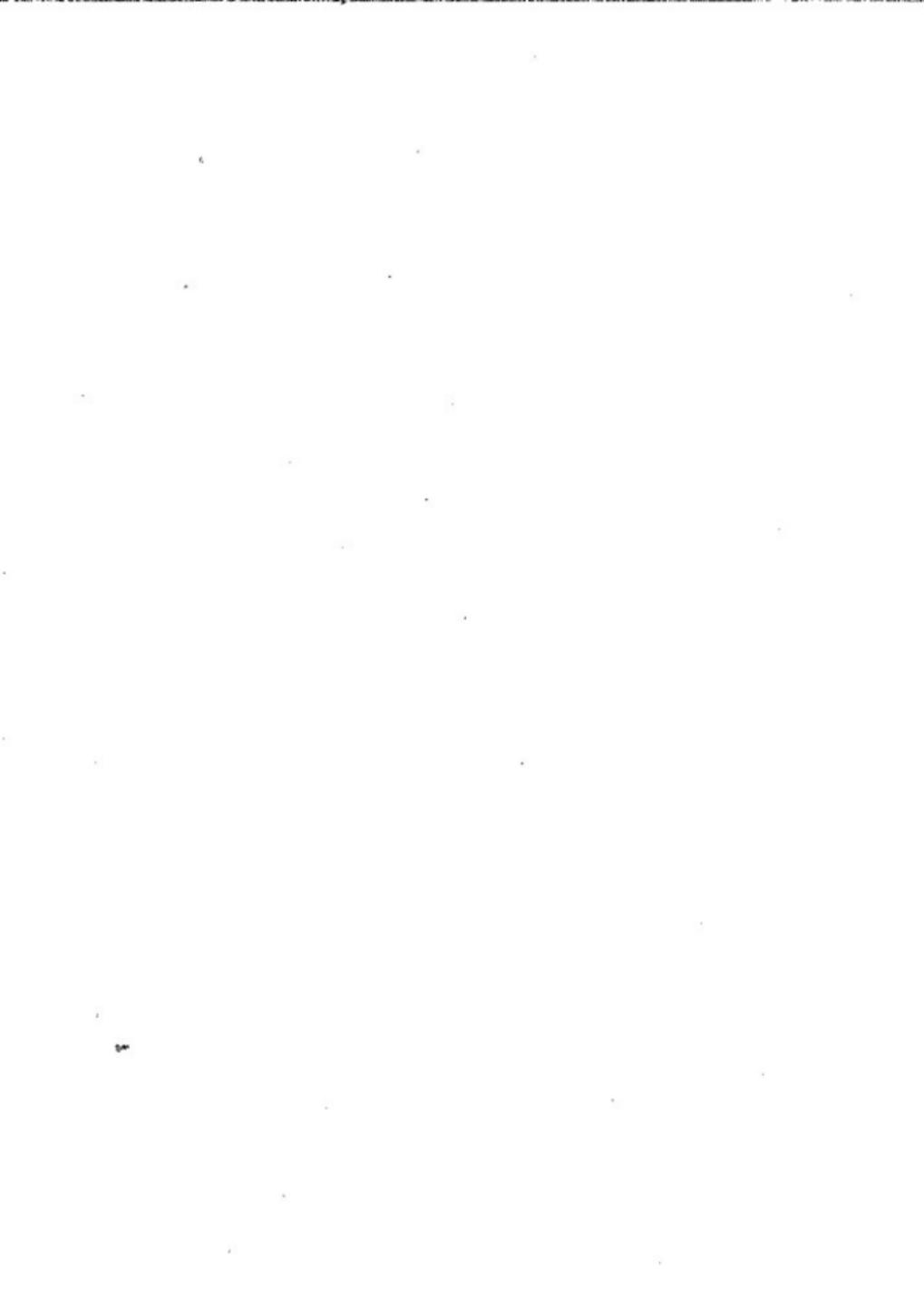
昭和55年度に県教育委員会が実施した緊急発掘調査についての調査組織は次のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

(事務局)	教育長	西本茂
	教育次長	甲斐俊則
	文化課長	坂口鉄夫
	課長補佐	山本一麿
	庶務係長	村田広則
	主任主事	田中君彦
	文化財係長	穂之上昇
	主任主事	山下正明
	主任主事	岩永哲夫(調査担当)
	主　　事	北郷泰道(　　)
(調査員)	石川恒太郎(県文化財保護審議会委員)	
	茂山護(県総合博物館主任)	

総 目 次

I. 南平横穴墓群発掘調査.....	1
(西臼杵郡高千穂町大字押方字南平1293)	
II. 土器田横穴墓群1～3号発掘調査.....	33
(宮崎郡佐土原町大字下那阿土器田12783-16, 12797-2)	
III. 上ノ原地下式古墳群1～10号発掘調査.....	79
(西諸県郡須木村大字中原字上ノ原1754-1)	
IV. 日守地下式古墳群55-1～4号発掘調査.....	153
(西諸県郡高原町大字後川内1-118, 302)	
V. 上沖遺跡発掘調査.....	195
(北諸県郡三股町大字樺山字上沖4332-6)	
(付) 昭和55年度埋蔵文化財発掘調査一覧(含昭55. 2～3)	211



南平横穴墓群発掘調査(55-1号~2号)

西臼杵郡高千穂町大字押方字南平1293

県 文 化 課 主 事 北 郷 泰 道
高千穂町社会教育課主事 田 尻 隆 介



本文目次

I	発見の契機と発掘調査に至る経過	(田尻)	5
II	遺跡の位置と環境	(北郷)	6
III	調査の結果	(〃)	8
1.	55-1号横穴墓		8
2.	55-2号横穴墓		16
3.	55-1号横穴墓前庭部出土の須恵器		18
IV	まとめ	(北郷)	20

挿図目次

第1図	遺跡所在地図		7
第2図	55-1号横穴墓実測図		9
第3図	55-1号横穴墓右屍床副葬品実測図		11
第4図	55-1号横穴墓左屍床副葬品実測図		13
第5図	55-1号横穴墓左屍床副葬玉類実測図		15
第6図	55-2号横穴墓実測図		16
第7図	55-2号横穴墓副葬品実測図		17
第8図	55-2号横穴墓副葬玉類実測図		18
第9図	55-1号横穴墓前庭部出土須恵器実測図		19

図版目次

図版1 (1)	南平横穴墓群遠景		21
(2)	55-1号閉塞の状態		21

図版 2	(1) 55+1号漠道及び玄室入口部の状態	22
	(2) 55-1号奥壁の状態	22
図版 3	(1) 55-1号奥壁及び右壁枕状施設の状態	23
	(2) 55-1号油流し切り込みの状態	23
図版 4	(上) 55-1号右屍床人骨及び副葬品の状態	24
	(下) 55+1号奥壁中央通路構及び辻金具の状態	24
図版 5	(1) 55-1号左屍床副葬品の状態	25
	(2) 55-2号玄室の状態	25
図版 6	(1) 南平横穴墓55-1号出土玉類	26
	(2) 南平横穴墓55-2号出土玉類	26
図版 7	南平横穴墓55-1号右屍床出土鉄器類	27
図版 8	南平横穴墓55-1号左屍床及び中央通路出土鉄器類	28
図版 9	(1) 南平横穴墓55-2号出土鉄器類	29
	(2) 南平横穴墓55-1号出土矢筈金具	21
図版10	南平横穴墓55-1号前庭部出土須恵器	30
図版11	整備後の南平横穴墓55-1号	31

I 発見の契機と発掘調査に至る経過

昭和55年7月5日、医療法人和教会国見ヶ丘病院が栗林造成のため、ブルドーザーにより掘削整地作業を行なっていたところ、横穴古墳らしきものを発見したという連絡があったので現場に急行した。

ここは標高313m、高千穂町の南西に位置し、附近一帯には縄文・弥生期の散布地があり、横穴もこれまでに県指定をはじめ数基発見されている。

遺構は北西向き斜面で掘削中に2基発見されたもので、1基はすでに羨道と玄室の先端側半分を斜面削除されていたが、もう1基は玄室の南東側の壁の一部が開口しているだけで、損傷も少なく遺構の原形をほぼ完全に保っていた。

ただちに、施行者の国見ヶ丘病院側と協議し、工事をストップするとともに、県文化課に連絡をとり緊急調査の運びとなった。ただ、調査実施までには数日の期間があり、その間遺構附近を立入禁止にするとともに、半崩壊の状態にある1基は町教委で応急的調査を行ない轡・鉄鎌・玉類・直刀等の遺物を採取した。また、もう1基は遺構内に水が溜っており、水抜き作業を行ない調査に備えた。

調査は原形を保っている遺構を1号墳、半崩壊の遺構を2号墳とし、7月23日から25日までの3日間、県文化課北郷泰道主事の担当で町教委職員が補助するとともに、安在一雄氏、押方市蔵氏等地元有志の方の協力を得て実施した。

調査終了後、1号墳については原形を保っている遺構が少なく、保存についての協力を求めた結果、同意を得ることができたので、年内に隣接の水田の崩壊防止、遺構の風化防止工事を実施した。保護工事にあたっては遺構の外形が崩壊しやすい状態にあったため、やむを得ず外形を固める結果になったが、羨道入口と開口している玄室の壁の部分に鉄の格子をつけ、見学等に資するよう配慮した。次年度以降、早目に町指定にするとともに、説明板等を設置し、保護啓蒙を図っていきたい。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

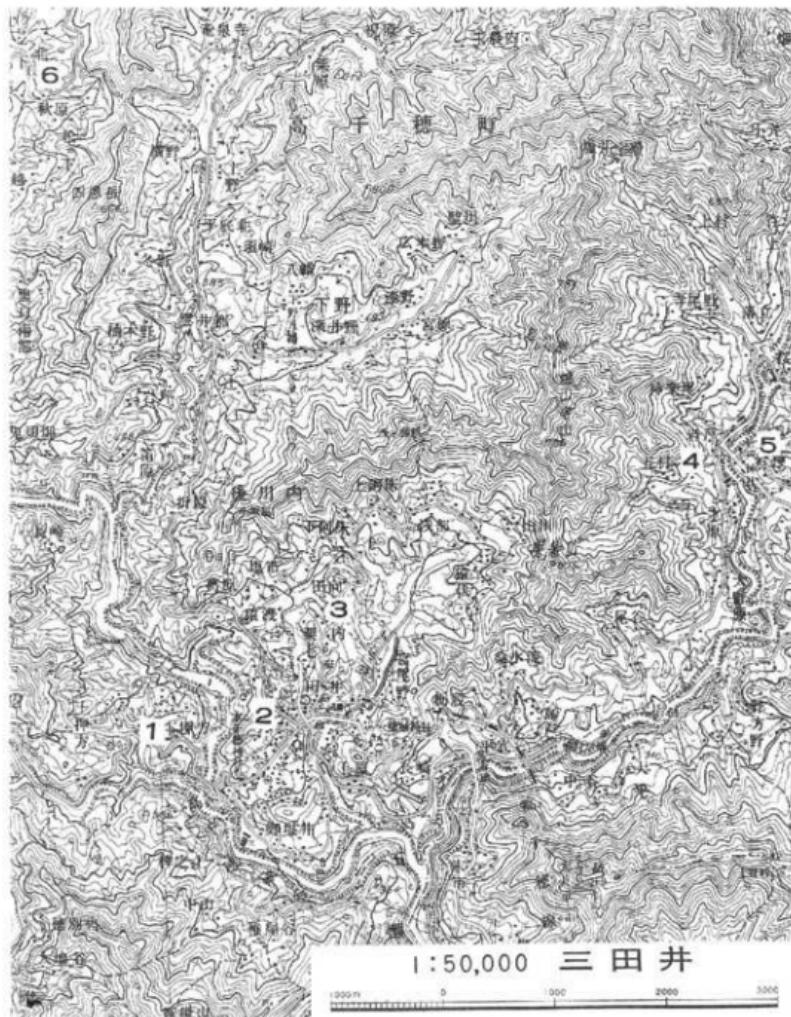
南平横穴墓群は、高千穂町の中心三田井から西に約1.5kmの大字押方字南平1,2,3番地に位置している。古生層の谷間を埋めた阿蘇火山噴出の溶結凝灰岩が再浸食されて形成された高千穂峠にかかる高千穂大橋を西に渡り、北の丘陵地に登ったところが広義の押方横穴墓群の所在地である。大字押方では、庄平、北平、南平の3字にわたり少なくとも7基の横穴墓の存在が知られていたが、今回発掘調査の対象となったものは、その内字南平に所在する新たに発見された2基である。

高千穂地方は、北を祖母・傾山系、西を阿蘇山、南を国見岳と標高1,500~1,700m級のいわゆる九州山脈に囲まれた標高330~350mの山間地域であるが、数多くの注目すべき遺跡の存在が知られる地域である。その一つ一つについてここでは触れないが、大分、熊本県に山を隔てて接するという特異な地理的条件は、この地にある種独特の原始・古代文化を開花させている。

横穴墓については昭和31年の小手川善次郎氏の『西臼杵郡高千穂町古墳調査書』¹⁾が、当時における一応の集成を目指して以来、昭和32年、柳宏吉氏調査の大字三田井字宮尾野一本木の横穴墓、昭和43年、石川恒太郎氏調査の大字三田井字吾平原の横穴墓、また昭和45年、石川氏調査の大字田原字染野平の横穴墓など、既にわれわれの知るところとなっている。この内、柳氏が先の宮尾野一本木横穴墓の報告と共に触れられている押方公民館敷地内の2基の北平横穴墓は、北平と南平と字名こそ違え道路一本を隔てた今回発掘調査の南平横穴墓と一群を成す横穴墓とみてよい。

註

1. 宮崎県高等学校教育研究会理科・地学部会編『宮崎県地学のガイド』
2. 柳 宏吉「横穴古墳」『宮崎県文化財調査報告書』第三輯、宮崎県教育委員会（昭和33年3月）
3. 石川恒太郎「高千穂町吾平原横穴古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第14集（昭和44年3月）
4. 石川恒太郎「高千穂町田原字染野平横穴古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集（昭和47年3月）



第1図 遺跡所在地図

- | | | |
|------------------|--------------|----------|
| 1. 押方横穴墓群(南平横穴墓) | 2. 神殿高千穂高校遺跡 | 3. 陣内遺跡 |
| 4. 五村遺跡 | 5. 岩神横穴墓 | 6. 薄糸平遺跡 |

III 調査の結果

1. 55-1号横穴墓(第2図)

2基の横穴墓は、約5m程隔て東西に位置しているが、この内西よりを1号、東よりを2号と呼ぶことにした。

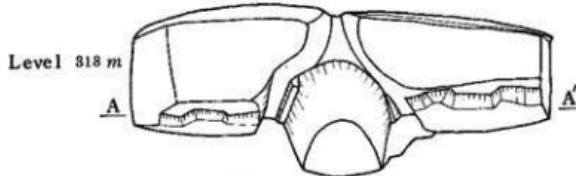
1号横穴墓は発見当時、横穴墓の上方が水田となっているため玄室のほぼ3分の1が浸水しており、こうした浸水は永い年月続いたものと思え、約4cm程の泥土が床面に堆積していた。

発見の契機となった重機による掘削は幸い玄室左隅の一部を破壊したのみで、そのほかは良好な保存状態を保ったものであった。横穴墓は、N 12° E のほぼ南北方向を主軸として、前庭部を南、玄室部を北にして構築されていた。前庭部の完掘は周囲の条件から困難であったが、羨門から2m程を発掘したところ、羨門部を底辺として三角形状に先細りとなる形状を示すものであった。羨門は横約80cm、縦約95cm、厚さ約15cmの板石で閉塞され、前庭部と羨門の間には約15cmの段差がつけられ、羨門は幅約55cm、高さ約55cmの不整形な五角形を呈している。

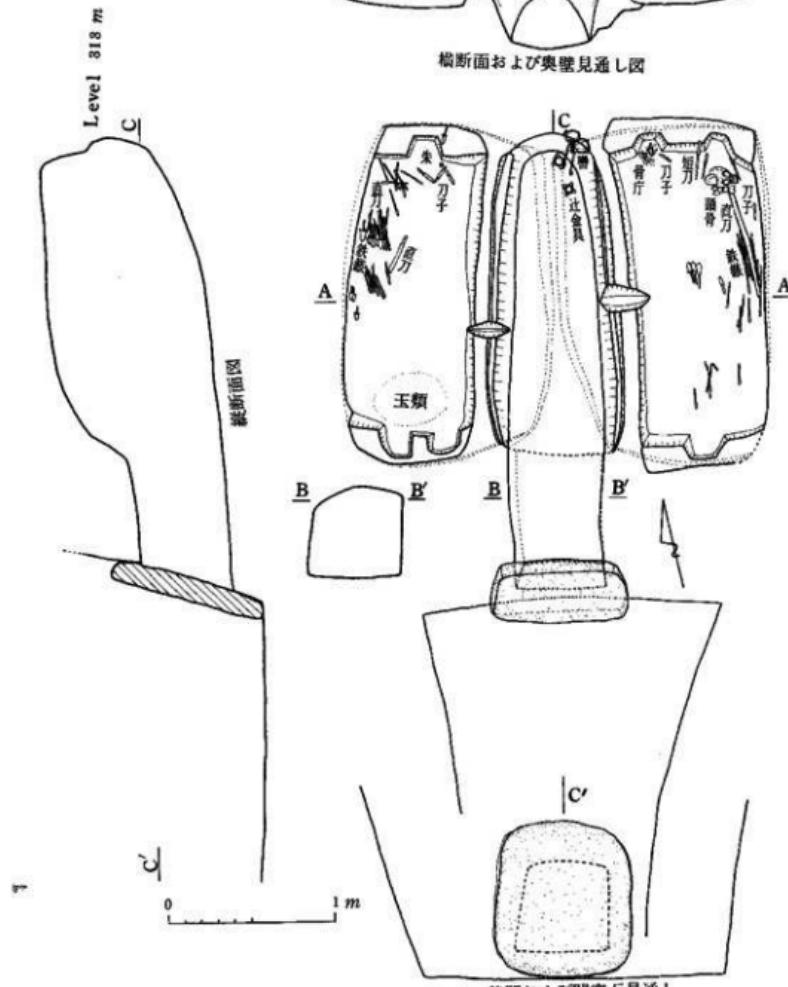
玄室は3区に分けられ、複雑な構造をもち、中央部は羨道から奥壁に向舟底状の通路となり、屍床はその左右に設けられている。屍床と通路の区切り部は、屍床から約10cm、通路から約37cmと高く造り出され、その幅10cm程の区切り部の中央には左右1箇所のV字形の油流しが掘り込まれている。屍床には造り付けの枕が設けられ、羨門からみて右の屍床には奥壁よりの土壇に2箇所の凹み部があり、羨門よりには土壇の中央部に1箇所凹み部が造られている。又、左の屍床は、これとは逆に羨門よりに2箇所の凹み部の枕があり、奥壁よりが中央部に1箇所の凹み部をもつものとなっている。右屍床奥壁側の右凹み部の傍に頭骨、左凹み部に骨片、左屍床には人骨の遺存は認められなかつたが、羨門側に玉類の散布がみられ、少なくとも本横穴墓の被葬者は3体以上であったと考えられる。屍床の幅は左右共に約70cm、長さは約150cmである。

* 粧状施設は明瞭なものではなく、右屍床壁面で認められるほかは左屍床壁面においては不明瞭なものとなっている。天井部中央には断面台形状の造り出しがあり、天井部までの高さは通路において最も高い所が97cm程で、左右屍床においては77cm程である。

副葬品には豊富な鉄器類が認められ、中央通路の奥壁よりに轡、辻金具、右屍床には鉄鎌



横断面および奥壁見通し図



第2図 55-1号横穴墓実測図

約50本、直刀1振、短刀及び刀子7振など、左尾床には鉄鎌約45本、短刀及び刀子6振、とほぼ同数の鉄器類が左右両尾床には副葬されていた。又、左尾床から玉類として小玉44個、管玉1個、算盤玉2個を検出しているが、前述したように玄室部を侵した水を掃き出した際失われたものもあると思われる。

又、前庭部からは高杯等の須恵器を検出している。

右尾床の副葬品（第3図、第4図7・8・51、図版7）

直刀（第3図1）

右壁面よりに副葬されていたもので、現存全長80.0cm、刀身の長さ68.0cm、背幅0.5cm、身幅は関寄りで3.4cm、峰寄りで3.0cmである。関幅は約2.0cmで、1箇所の目釘穴には目釘が遺存している。

短刀及び刀子（第3図2～6、第4図7・8）

2・3は、頭骨左上に副葬されていたもので、2は現存全長22.5cm、刀身の長さ15.8cm、身幅は1.6cm、背幅は0.4cm、3は現存全長17.3cm、刀身の長さ12.8cm、刀身中央部での身幅1.5cm、背幅0.3cmである。2には柄部が比較的良く残っている。

4は、直刀の柄部に近い尾床中央部に副葬されていたもので、現存全長13.2cm、刀身の長さ10.0cm、刀身中央部での身幅1.5cm、背幅0.5cmである。

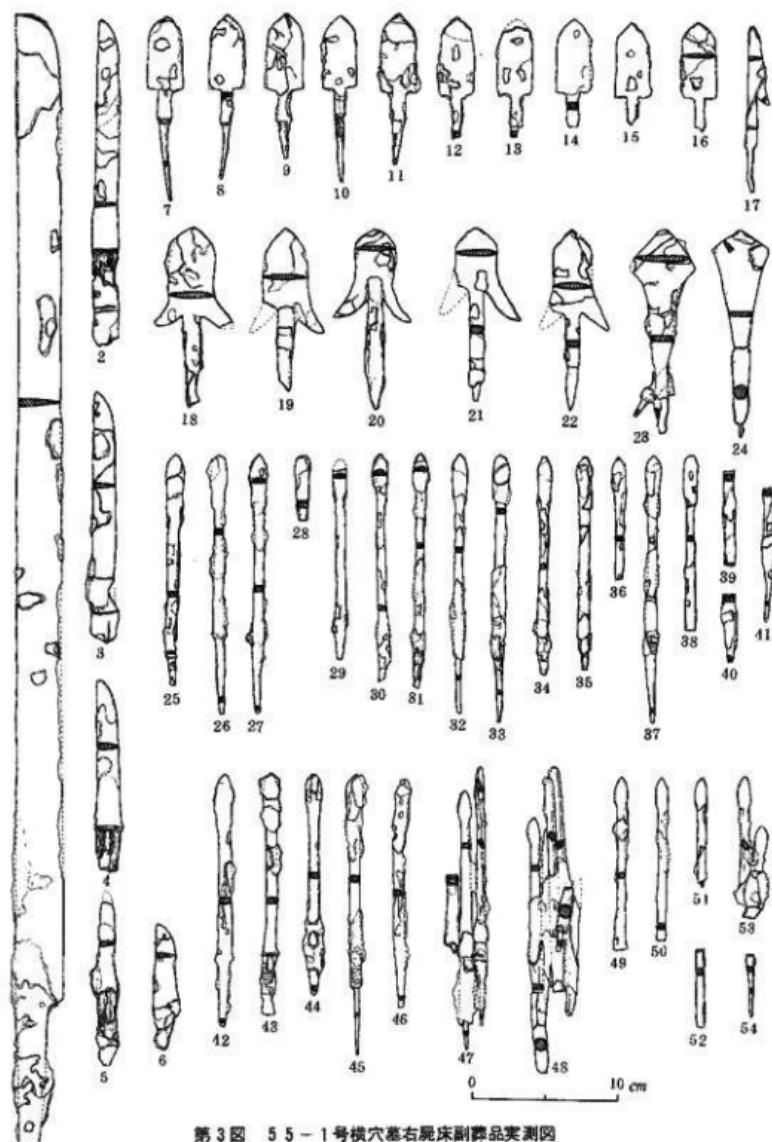
5は、直刀の右端面近くに副葬されていたもので、峰を欠き、現存全長11.3cm、現存の刀身の長さ6.2cm、身幅1.1cm、背幅0.4cmである。

6は、枕部の左凹み近くに副葬されていたもので、現存全長8.5cm、刀身の長さ5.8cm、身幅は峰寄りで1.3cm、背幅0.4cmで、峰から刃区にかけて湾曲した切り出し部をもつ。

7は、現存全長7.3cm、刀身の長さ4.7cmで、身幅・背幅は鋒のため計測困難である。8は、峰を欠き、現存全長8.2cm、現存の刀身の長さ3.7cm、身幅0.9cm、背幅0.4cmである。

鉄鎌（第3図7～54）

鉄鎌は大きく5種類に分類出来る。7～16は、直刀の刀身の中程から柄部にかけての尾床中央部に一塊りに副葬されていたもので、笠被類柳葉兩丸造三角形式の鉄鎌である。よくその外形をとどめるものは7・8・10であるが、それぞれ形状に大差はない、極めて規格性の強い製品である。鎌身の長さ5cm、厚さ0.3cm、笠被の長さ約2.0cm、厚さ0.3cm、その下方に細長い茎が付き光形品においては約5.5cmを測る。この鉄鎌の大きな特徴は、他の鉄鎌に比べ厚みが薄く、軽量なことである。



第3図 55-1号横穴墓右屍床副葬品実測図

17は、21・22・24と共にあったもので、笠被脇挟片刀箭式の鉄鎌で1本を認めるのみである。現存全長11.3cm、鎌身中央での身幅0.9cm、背幅0.2cmで、笠被の幅0.8cm、厚さ0.2cmを測る。

18～22は、形状に差異が認められるが、勝抉をもつ柳葉式（慈姑葉式）の鉄鎌である。18～20は、前記の類柳葉三角形式の鉄鎌と一塊となっていたもので、鎌身の厚さは0.3～0.4cmである。21・22は屍床中央部に前記の片刀箭式と共に副葬されていたもので、鎌身の厚さ0.3～0.4cm、笠被の幅1.0cm、厚さ0.5cmを測る。以上5点の鉄鎌は、鎌身の幅は3cm以内であるが、勝抉部の幅は5cmを前後するものと思われる。

23・24は変形半頭斧箭式に属するもので、23は類柳葉三角形式及び18～20の柳葉式の鉄鎌と共にあり、24は片刀箭式及び21・22の柳葉式の鉄鎌と共にあったものである。23の鎌身最大幅は約4.6cm、厚さ0.4cmで、24の鎌身最大幅は3.8cm、厚さ0.3cmである。24には矢柄が遺存しているが、矢柄部までの長さは8.0cmで、矢柄の径は1.0cmである。

25～54の多くは類柳葉三角形式の鉄鎌と一塊りに遺存したが、47～54は屍床南部分に散在し、46は頭骨横にあった。これらは尖根の整箭式に大略属するものと思われるが、形状には幾分差異が認められ両丸造のほかに27・30・31・47などの片丸造のものが含まれている。鎌身は先端部から笠被にかけてならかに変化するものと、段を有するものとがあり、鎌身及び笠被の長さは12.5cm前後で、最も良く遺存していると考えられる45の茎の長さは4.5cmである。又、笠被の幅0.8cm、厚さ0.4cmを平均とする。

銛金具（第4図51）

両端に銛頭のある金具で、木質の遺存するものもある。全長は3.2cm程度で、軸径は0.3cm程度である。本金具の性格については、後に考察したい。

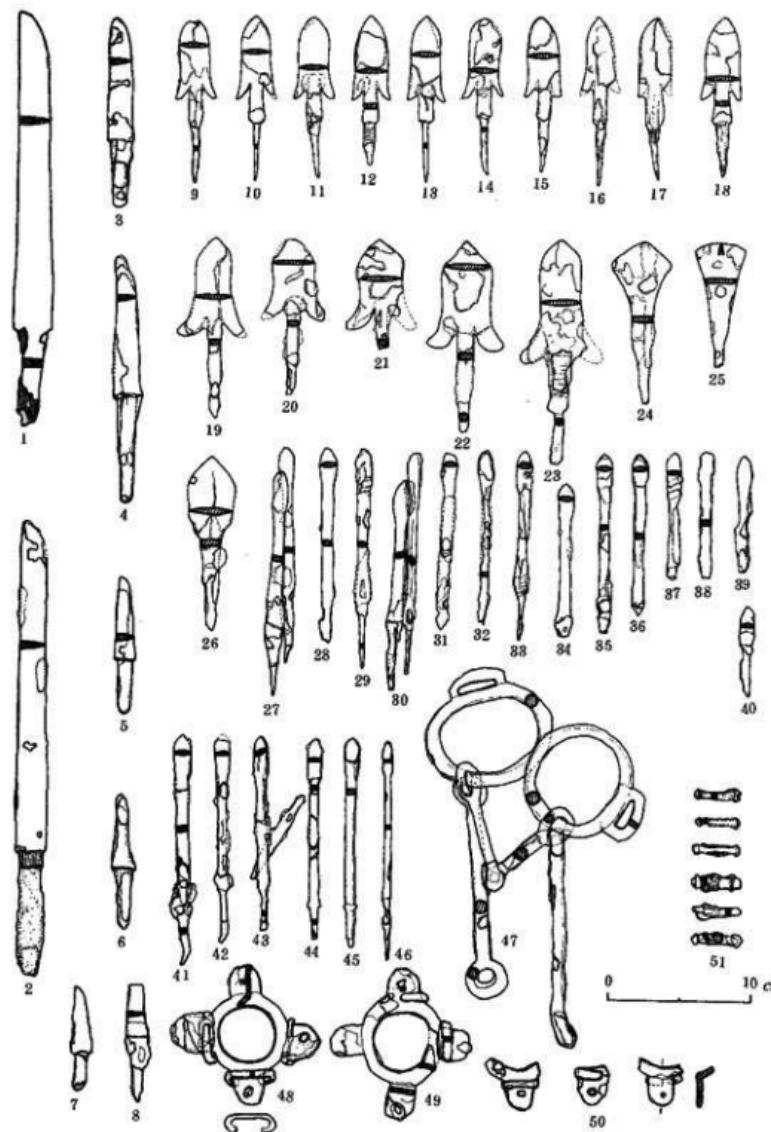
中央通路部の副葬品（第4図47～50、図版

轡（第4図47）

通路部の奥壁に遺存していたもので、各部描っている。鏡板は外径7×9cmの精円素環で、造り付けの立輪が付いている。素環の断面径は約1cmである。衝は連結の二連式で、約9cmの両端を環形にした鉄棒を連結している。引手は15.3cmを測る。

辻金具（第4図48～50）

外径5.6cm、内径3.7cmの環の外側に4個の突出部をもち、突出部の中央には一つの爪が



第4図 55-1号横穴墓左屍床副葬品実測図(47～50は通路, 7・8・51は右屍床)

打たれている。突出部は隅丸を呈し、幅 2.1 cm, 長さ 1.9 cm を測る。各々の突出部には裏面へと折り返された幅 0.5 cm の鉄板が巻かれている。

左腰床の副葬品（第4図1～46, 第5図, 図版8）

短刀（第4図1・2）

1は、後述する柳葉式の鉄鎌と共に左壁面よりに副葬されていたもので、現存全長 2.9.3 cm, 刀身の長さ 2.2.4 cm, 身幅は開寄りで 2.6 cm, 鋒寄りで 2.1 cm, 背幅 0.5 cm を測る。開幅は 1.5 cm, 厚さは 0.5 cm で、柄部の木質等はほとんど遺存しない。2は、1とやや離れた尾床中央部にあり、現存全長 3.2.1 cm, 刀身の長さ 2.3.3 cm, 身幅は開寄りで 2.1 cm, 鋒寄りで 1.8 cm とやや細身のものである。背幅は 0.5 cm を測る。

刀子（第4図3～6）

3と4は、奥壁よりの凹み部の近くにV字形に、3は鋒を渾門方向に、4は逆に奥壁方向に向けて副葬されていた。3は現存全長 1.3.3 cm, 刀身の長さ 8.5 cm, 刀身中央部での身幅 1.8 cm, 背幅 0.5 cm を測る。4は現存全長 1.7.4 cm, 刀身の長さ 1.0.1 cm, 刀身中央部での身幅 1.6 cm, 背幅 0.4 cm を測る。5は4と逆V字形に渾門方向に鋒を向け副葬されていたもので、現存全長 9.7 cm, 刀身の長さ 5.8 cm, 刀身中央部での身幅 1.1 cm, 背幅 0.4 cm を測り、わずかに鋒から刃区にかけて湾曲した切り出し部をもつ。6は1の短刀及び鉄鎌と共に混在していたもので、現存全長 9.4 cm, 刀身の長さ 5.1 cm を測るが、そのほかの計測値は锈が著しく不明である。5と同じく鋒から刃区にかけて湾曲した切り出し部をもつ。

鉄鎌（第4図9～46）

9～18は笠被両丸造脇抉柳葉式の鉄鎌で、9が奥壁造り出し部に置かれていたほかは、尾床中央部の左壁面よりに一塊りに副葬されていたものである。それぞれの形状には、ことに脇抉部に若干の差異が認められるが、大小の差はみられず、鎌身から笠被の長さ約 7.5 cm, 鎌身の幅は 2 cm を前後するもので、厚さは 0.3 cm 程度である。基は原形をとどめるもので長さ 4.0 cm を測る。

19～23は、形状及び大小の差異がみられるが、脇抉をもつ柳葉式（慈姑葉式）の鉄鎌で、尾床北側の左壁面よりに一塊りに副葬されていたものである。鎌身は脇抉部までを含め最も小さなもので、長さ約 5.8 cm, 最も大きなもので、長さ約 8.7 cm を測る。

24は前記の鉄鎌類と共に混在していたもので、変形主頭斧箭式の鉄鎌である。現存全長 1.1.3 cm, 鎌身最大幅 4.1 cm, 笠被部の幅 1.4 cm, 厚さ 0.4 cm を測るが、鎌身の厚さは锈の

ため不明である。

25も同様前記の鉄鎌類と共に配在していたもので、方頭広根斧箭式の鉄鎌である。現存全長8.8cm、鎌身最大幅3.5cm、厚さ0.4cmを測る。

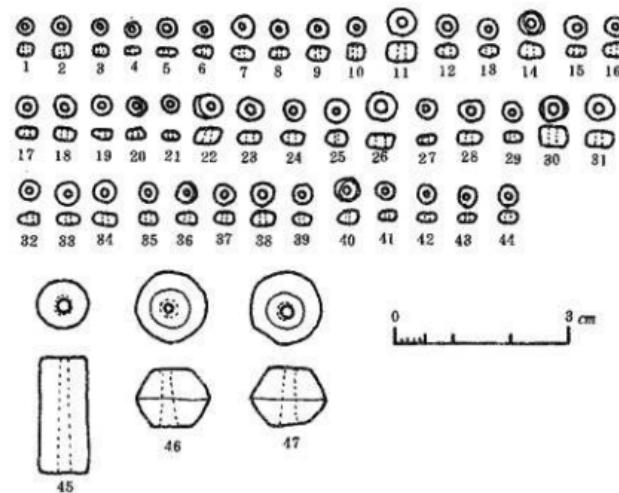
26も副葬状態は前記と同様で、生頭式の鉄鎌である。現存全長1.22cm、鎌身最大幅3.4cm、厚さ0.4cmを測る。

27～46の多くは柳葉式の鉄鎌と一塊りに副葬されていたが、44～46は10～18の柳葉式の鉄鎌近くに散在していた。これらも大略尖根の鑿箭式に属するものであるが、31・37・42～44・46は片丸造で、ことに46は他に比べ細身のものである。

玉類(第5図)

1～44の小玉はすべてガラス製で、9は黄色、他は透明及び白済した青緑色を呈する。ほとんどが扁平な球形をなし、大小差があるが、最も小さなもののが径0.3cm、最も大きなものが径0.5cmで、孔径も小さなものが0.1cm、大きなものが0.2cmである。

45は淡緑色を呈する碧玉製の管玉で、長さ2.0cm、径0.9cmを測る。穿孔は一方方向からなされ、大きい孔径が0.2cm、小さい孔径が0.1cmで、仕上げは比較的丁寧に行われている。



第5図 55-1号横穴墓左屍床副葬玉類実測図

46・47はさほど質の良くない水晶製の算盤玉で、最大径1.3cm、厚さ1cmを測る。共にやや不整形で、穿孔は一方方向からなされ、大きい孔径が0.3cm、小さい孔径が0.2cmである。

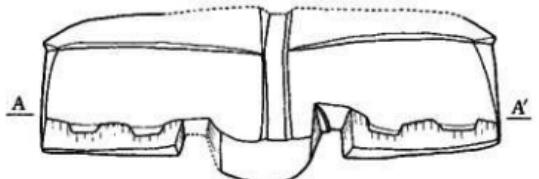
朱玉

朱玉は、4の刀子の鋒近くから検出されている。

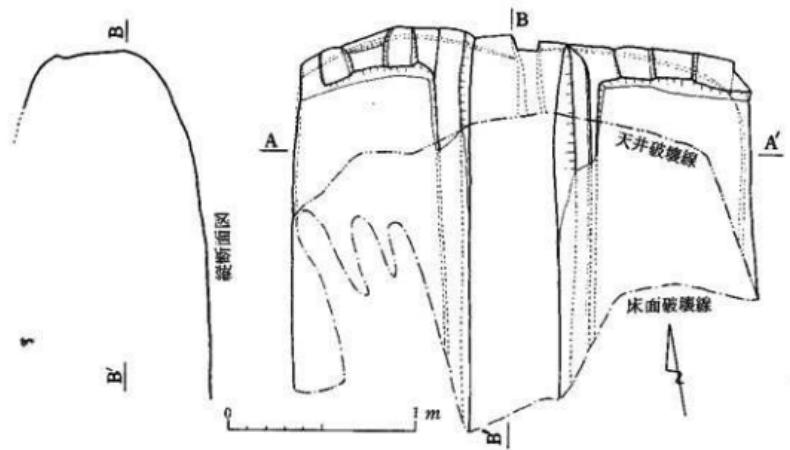
2. 55-2号横穴墓(第6図)

2号横穴墓は、玄室床面のほぼ2分の1、天井部においてはそのほとんどが重機により破壊されており、副葬品についても副葬状態をうかがえるものは限られている。

横穴墓は、N10°Eのほぼ南北方向を主軸とし、1号横穴墓と同様前庭部を南、玄室部を北にして構築されていたものと考えられる。



横断面および奥壁見通し図



第6図 55-1号横穴墓実測図

玄室の構造は、1号横穴墓ほど複雑なものではないが、3区に分けられ、中央通路は断面丸底を呈し奥壁との境はややはっきりしている。左右両屍床との区分は高さ10cm程の造り出しによってなされ、左右両屍床共奥壁に二箇所の凹み部をもつ枕が造り出されている。屍床の幅は共に約70cmである。奥壁には柱状の造り出しがあり、それは天井部へとまわっている。棚状施設は1号横穴墓に比べ明瞭に掘り込まれている。

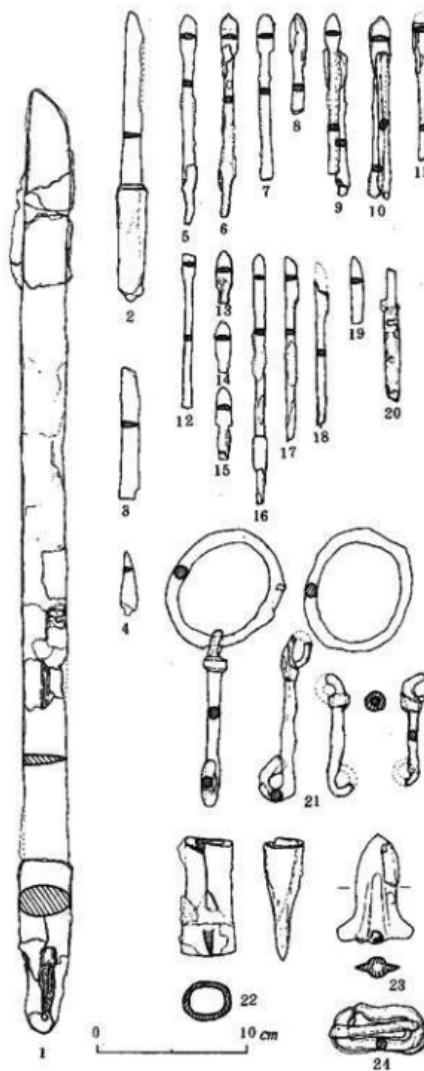
副葬品（第7図、第8図、
図版9）

直刀（第7図1）

右屍床壁面よりに埋葬されていたもので、現存全長63.2cm、刀身の長さ51.5cm、関寄りでの身幅2.9cm、背幅0.6cmを測る。柄部には木質が遺存し、幅（長軸）3.5cm、厚さ（短軸）2.0cmの断面卵形を呈する。目釘穴は1箇所認められることがある。

刀子（第7図2～4）

2は細身で長身の刀子で、現存全長19.3cm、刀身の長さ1.5cm、刀身中央部での身幅1.3cm、背幅0.3cmを測る。柄部は良く遺存している。3は刀身のみで、現存全長



第7図 55-2号横穴墓副葬品実測図

8.8 cm, 中央部での身幅 1.1 cm, 背幅 0.4 cm を測る。4も刀身のみで、現存全長 4.3 cm を測り、刃は鉛に向け三角形状にせばまるもので、背幅は 0.3 cm である。

鐵鎌(第7図5~20・23)

5~16は、尖根の繩箭式に属するもので、6~10・13~16は片丸造である。その形状にみる差異は1号横穴墓副葬のものと大差はない。17~19は、籠被片刃箭式の鐵鎌で、鎌身の幅 0.9 cm, 厚さ 0.3 cm である。23は無基の懸鉤葉式に形状の似た鐵鎌である。鎌身最大幅 5 cm, 最小幅 2.6 cm, 現存全長 7.2 cm を測る。

轡(第7図21)

鏡板は外径 7 × 8.7 cm の精円素環で立開輪は造り付けられていない。柄は連結の二連式で、一つの長さが約 8 cm, 引手は 1.8 cm を測る。柄、引手共鏡板の方に連結する環は、単に折り曲げ環状を形作ったものではなく、環状に折り曲げたのち軸となる鉄棒に巻きつけてあるのが特徴である。

鉄斧(第7図22)

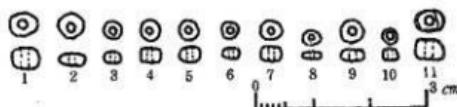
全長 8.0 cm, 刃先の幅 3.6 cm の無肩股形の鉄斧である。袋部は外径 2.5 × 3.1 cm, 内径 1.8 × 2.3 cm を測る。袋部内には若干の木質が遺存している。

鉗具(第7図24)

鉗具と思われる継付きの著しい鉄器である。長軸 5.9 cm, 短軸 2.8 cm を測る扁平な精円形を呈するものである。

玉類(第8図)

11個の小玉を検出したにとどまる。すべて、透明及び白濁した青緑色を呈するもので、最も小さなものは



第8図 55-2号横穴墓副葬玉類実測図

の径 0.3 cm, 最も大きなものの径 0.5 cm で、孔径も 0.1 cm から 0.2 cm 程度である。両端部は平坦で扁平な球形を呈し、両端の角は丸く仕上げられている。

3. 55-1号横穴墓前部出土の須恵器(第9図、図版10)

は有蓋高杯の蓋である。頂部につく扁平なつまみは中凹みで、径 3.0 cm, 高さ 0.9 cm を測る。天井部は丁寧にヘラ削りされ、口縁部とのさかに二段の沈線様の凹みがついている。口縁部にかけてはヨコナデ、裏面大井部はナデ、他はヨコナデである。又、天井部から口縁部にかけて二条のヘラ記号が認められる。色調は青灰色～黒灰色、断面は赤灰色を呈し、焼

成は良好である。

2は、杯の蓋である。天井部はヘラ切り離しのままで、口縁部にかけてがヨコナデである。裏面天井部はナデ、他はヨコナデである。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。やや大きめの石砂粒を含む。

3は、杯身である。底部はヘラ削りのままで、口縁部にかけてがヨコナデである。底部内面はナデ、他はヨコナデである。立ち上がり部分を欠損しているが、底の比較的浅いタイプである。

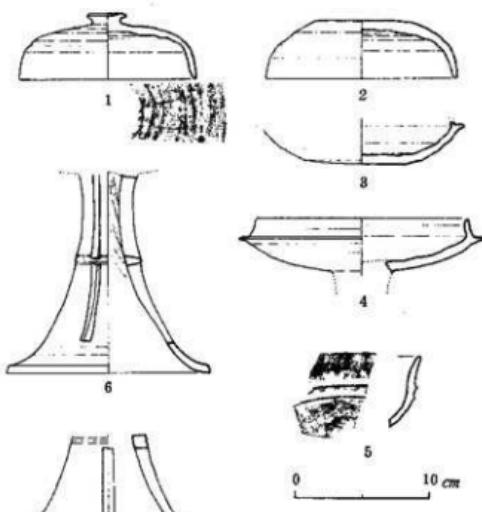
4は、高杯の杯部と考えられ、6に接合するものであるかもしれない。底面は粗いヘラ削りを残し、脚部との接合部には、二条の細いヘラ記号が認められる。立ち上がりはやや内

傾し、口縁端部はゆるやかに先細りとなる。蓋受けは水平にのび先端は丸みを帯び、下方にややはり出している。内面、口縁はヨコナデである。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

5は、無蓋高杯の口縁部である。7に接合するものであるかもしれない。口縁部から肩部にかけて、二条の小さな断面三角凸帯をめぐらし、その下に櫛描波状文を施している。精緻な胎土をもち、色調は黒灰色、焼成は良好である。口径の復元は出来ない。

6は、高杯の脚部で、二段三方の長方形の透し孔をもつ。上下透し孔の部位は、横位の崩毛目調査が明瞭に認められ、他はヨコナデである。又、上下透し孔の区画は二条の沈線でなされ、内面には若干斜位のしぶり目がみられる。やや大きめの石砂粒を含み、色調は暗灰色で焼成は良好である。

7も高杯の脚部で、二段二方の長方形の透し孔をもつものと思われる。調査は全面ヨコナデ、色調は暗灰色で一部黒色を帯び、焼成は良好である。



第9図 55-1号横穴墓前庭部出土須恵器実測図

IV まとめ

南平横穴墓は、過去の調査例とも比べ、高千穂地方における横穴墓の一つの典型を成すものと考えられる。そして、それは明らかに宮崎県内においては平野部の代表的な宮崎市蓮ヶ池横穴墓群などとは、形態及び副葬品の様相を異なるものである。そこには色濃く熊本県を中心として分布する、いわゆる「肥後型」の影響が存在している。玄室を3区に区画し、造出しの枕を付設する形態は「肥後型」そのものといえる。

さらに、副葬品に注目した場合、副葬された鉄鏃はことに宮崎県南及び鹿児島県北部にかけて分布する地下式横穴の鉄鏃と異種のものである。大型の脇抉をもつ平根鏃は、延岡市付近まで分布することが知られるが、現在のところ県南においてその出土例は少なく、そのほかの鉄鏃類も、同類のものはあっても、同型式のものはほとんど存在しないと言える。

さて、55-1号横穴墓の右屍床と左屍床の副葬品を比較した時、次のような符号する点と相違する点とが存在することを指摘することが出来る。まず、副葬された鉄鏃の数に、共通した傾向を見出すことが出来る。

(左屍床)	本数	(右屍床)
笠被脇抉柳葉式	共に10本	笠被類柳葉三角形式
慈姑葉式	共に5本	慈姑葉式
鑿箭式	24~30本以上と共に多量	鑿箭式

その他、変形主頭の鉄鏃など、上記のいずれにも属さないタイプの鉄鏃が各々1~3点づつ共に副葬されている。笠被脇抉柳葉式と笠被類柳葉三角形式は、脇抉の有無という相違はある、その形状の類似と數量の符合は意図的なものと考えざるを得ない。

その他、右屍床の直刀、左屍床の玉剣と相違する副葬品も存在するが、しかし、それもまた副葬されたものという観点に置き変えて見る時、その性格について速断することは許されないが、明らかな意識性といったものをうかがい知ることが出来る。

横穴墓の年代としては、須恵器の年代觀から、6世紀代に位置付けられよう。



(1) 南平横穴墓群遠景



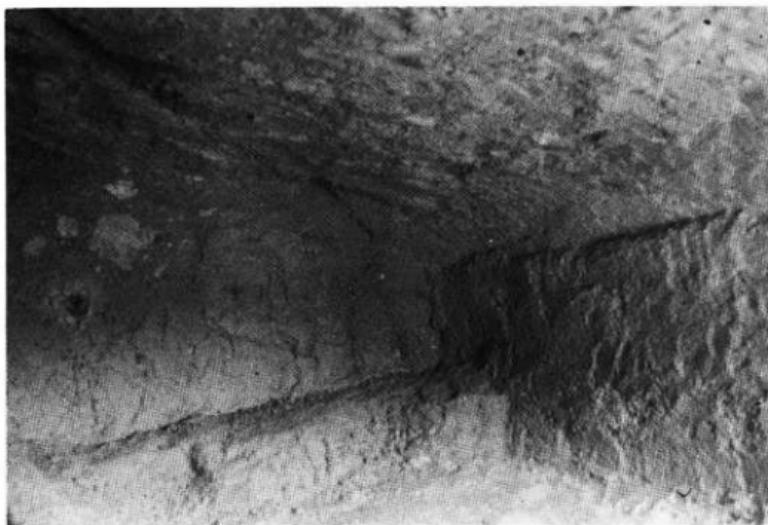
(2) 55-1号閉塞石と閉塞の状態



(1) 55-1号巷道及び玄室入口部の状態



(2) 55-1号奥壁の状態



(1) 55-1号奥壁及び右壁枕状施設の状態



(2) 55-1号油流し切り込みの状態



(上)

(下)

55-1号右屍床人骨及び副葬品の状態





(1) 55-1号左屍床副葬品の状態



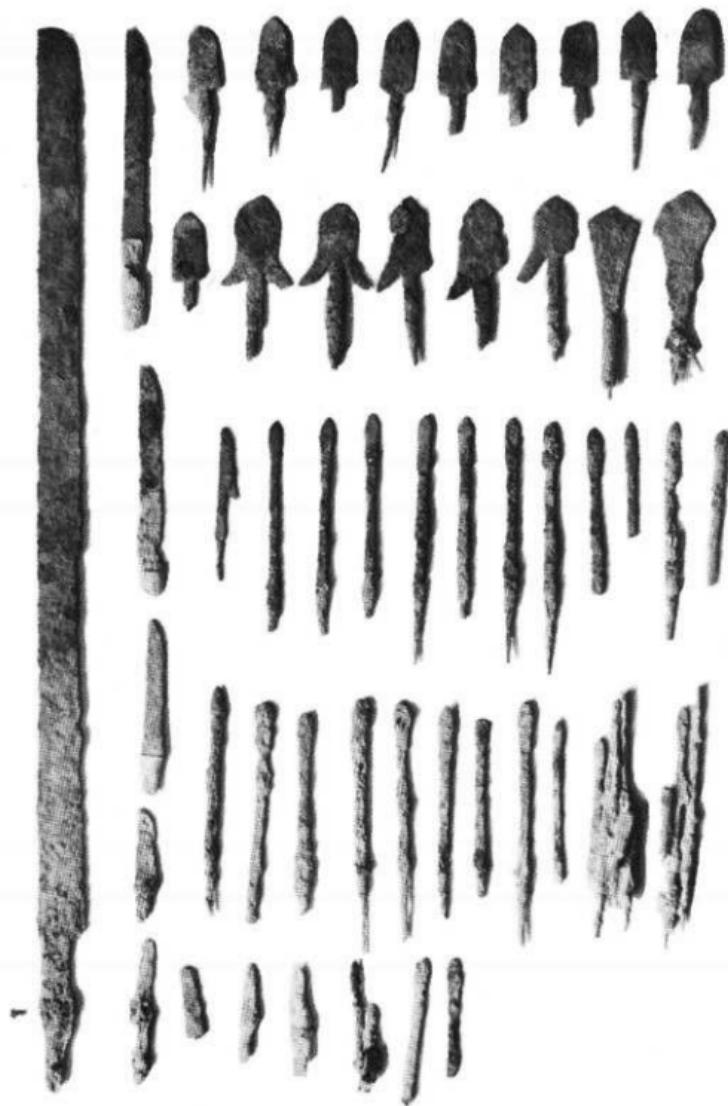
(2) 55-2号玄室の状態



(1) 南平橫穴墓 55-1 号出土玉頸



(2) 南平橫穴墓 55-2 号出土玉頸



南平橫穴墓 55-1 号右屍床出土鐵器類



南平横穴墓 55-1号左屍床及び中央通路出土鉄器類



(1) 南平橫穴墓 55-2 号出土鐵器類



(2) 南平橫穴墓 55-1 号出土矢筈金具



南平橫穴墓 55-1号前庭部出土須惠器

図版 11 整備後の南平横穴墓 55-1号



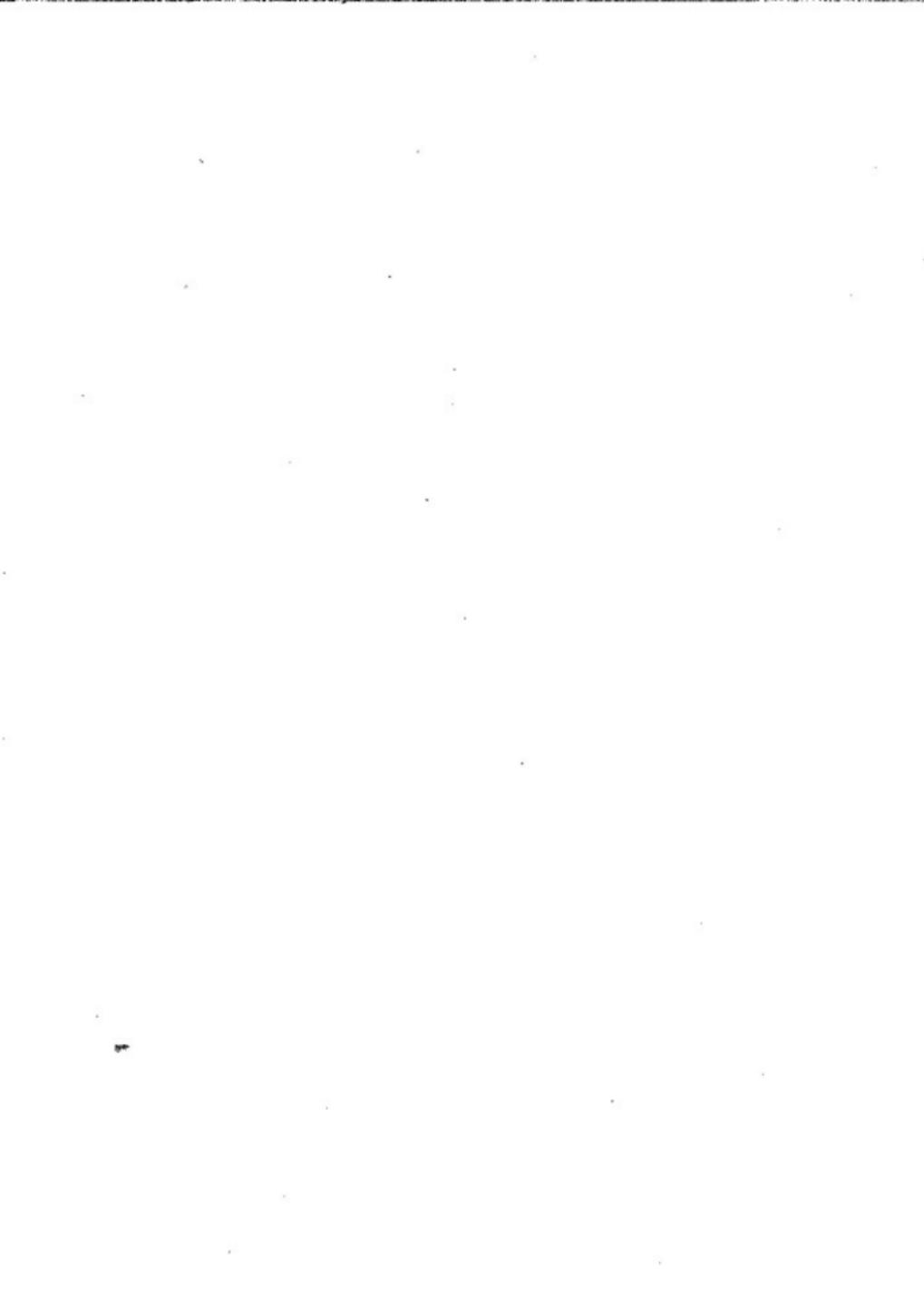


土器田横穴墓群発掘調査(1~3号)

宮崎郡佐土原町大字下那珂土器田12783-16, 12797-2

県文化財保護審議会委員 石川 恒太郎

県文化課主任主事 岩永 哲夫



本文目次

I	発掘調査の概要	(岩永)	39
1.	発掘調査に至る経緯		39
2.	調査経過		39
II	遺跡の立地と環境	(〃)	40
III	第1号横穴墓	(〃)	43
1.	横穴墓の構造		43
2.	出土遺物		43
IV	第2号横穴墓	(〃)	48
1.	横穴墓の構造		48
2.	出土遺物		48
V	第3号横穴墓	(〃)	53
1.	横穴墓の構造		53
2.	出土遺物		53
VI	結語	(〃)	60

挿図目次

第1図	遺跡所在地		38
第2図	横穴墓分布図		42
第3図	土器田1号横穴墓実測図		44
第4図	1号横穴墓出土遺物実測図(1), 須恵器(1)		45
第5図	" (2), " (2)		46
第6図	" (3), " (3)		47
第7図	"		48
第8図	土器山2号横穴墓実測図		49

第 9 図	2 号横穴墓出土遺物実測図(1)	5 0
第 10 図	" (2)	5 2
第 11 図	" (3)	5 2
第 12 図	土器田 3 号横穴墓実測図	5 4
第 13 図	3 号横穴墓出土遺物実測図(1)	5 5
第 14 図	" (2)	5 7
第 15 図	3 号横穴墓出土遺物実測図(3)	5 8
第 16 図	" (4)	5 9

図 版 目 次

図版 1	第 1 号横穴墓 (1) 渠道から玄室を見る	6 3
	(2) 玄室天井部	6 3
図版 2	" (1) 玄室内の状態	6 4
	(2) 玄室から渠道を見る	6 4
図版 3	" 遺物	6 5
図版 4	第 2 号横穴墓 (1) 渠道から玄室を見る	6 6
	(2) 遺物出土状況	6 6
図版 5	" 遺物出土状況	6 7
図版 6	" (1) 遺物出土状況	6 8
	(2) 玄室側壁	6 8
図版 7	" 遺物(1)	6 9
図版 8	" (2)	7 0
図版 9	第 3 号横穴墓 (1) 渠道	7 1
	(2) 渠道から玄室を見る	7 1
図版 10	第 3 号横穴墓遺物出土状況	7 2
図版 11	"	7 3

図版 1 2	第 3 号横穴墓遺物出土状況	7 4
図版 1 3	" 遺物(1)	7 5
図版 1 4	" " (2)	7 6
図版 1 5	" " (3)	7 7
図版 1 6	" " (4)	7 8

表 目 次

第 1 表	県指定史跡広瀬村古墳	4 0
第 2 表	遺跡所在地一覧表	4 1
第 3 表	佐土原町内既調査横穴墓一覧表	4 1
第 4 表	出土遺物一覧表	6 0
第 5 表	ヘラ記号のある土器一覧表	6 1



第1図 遺跡所在地

1. 土器田横穴墓群

2. 県総合農試真横穴墓群

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経緯

財団法人佐土原町開発公社では、同町内に住宅の需要が多いため、佐土原町大字下那珂の丘陵地に団地造成計画を立てたが、計画地域には広瀬村古墳として昭和14年1月27日に県指定になっている横穴墓が分布していることから、昭和50年11月5日付けでその取扱いについて県教育委員会に協議を行った。それに対し、県指定横穴墓は保存が第1であるので計画からはずすよう指導があった。そのため、指定地周辺の状況を知ることが必要になり、県文化課、佐土原町教育委員会、佐土原町開発公社で分布調査を行い、設計変更をしたが、3基の保存については技術的な困難さがあり、記録保存の措置を取らざるを得なかったのである。発掘調査は、県教育委員会の指導のもとに佐土原町開発公社が調査主体者になり、昭和51年3月15日から3月25日まで実施した。

調査主体 佐土原町開発公社 理事長 山内 安朗

調査員 石川恒太郎（宮崎県文化財専門委員）

〃 岩永 哲夫（県教育庁文化課主事）

作業員として、宮崎大学史学研究部の学生、足立宏美、浦川雄、渡辺康隆、諸方昭彦、武藤和幸君が参加した。

2. 調査経過

発掘調査は3月15日から3月25日までの内9日間実施したが、経過については日誌抄に留める。

3月15日（月）雨後晴 第1日目

1・2号ともに表道・玄室部分が埋まっていたので、耕土作業から始める。

1号：玄門付近に須恵器出土。

3月16日（火）晴 第2日目

1・2号とも前庭部に15～20年生の杉があり、作業に支障をきたす。

1号：玄室内部に板瓦の形跡はみられないが、砂岩礫の散らばりはある。前庭部に浮いた状態で須恵器片出土。

3月17日（水）暴後晴 第3日目

1号：昨夜來の雨で玄室内は満水状態になり、ビニールホースで汲み出し作業を行ったが、時間がかかり前庭部床面検出まではできなかった。

2号：前庭部の検出作業を終了したが、盗り出しは見られず、前面は自然のままと思われる。

3月18日(木)晴 第4日目

1号：前庭部検出作業、狭道部付近に須恵器片出土。

2号：玄室内遺物検出作業。3号：前庭部検出作業。

3月19日(金)晴 第5日目

1号：狭道付近の排土作業、玄室奥の石群は敷石と見られる。2号：平面図作成、土器・鉄器の取り上げ。3号：前庭部検出作業。

3月22日(月)曇 第6日目

冬の日の様に寒い。

1号：玄室遺物検出作業。3号：ほとんど埋もれているので排土に手間どる。

3月23日(火)晴 第7日目

1号：実測作業。3号：昨日に引き続き作業。

第1表 県指定史跡広瀬村古墳(昭14.1.27)
土器田関係のみ

3月24日(水)晴 第8日目

1号：午前中で実測終了。3号：全員で排土作業を行う。玄室奥に金環1個発見。

3月25日(木)晴 第9日目

3号：玄室床面清掃作業、狭道中央に一段の掘込みあり、落ちたまま前庭へ続く。狭門左側に大小2個の平瓶が上向きに置いてある。疎ほか土器多数出土。床面より金釘と思われる鉄器を多數発見。午後3時から実測を行い、調査のすべてを終了した。

字	地番	基数	その他
土器田	12824	1	
〃	12793-2	6	
〃	12792	2	
〃	12783-16	2	今回調査分
〃	12790	2	
〃	12814	1	
計		14	

II 遺跡の立地と環境

今回発掘調査することになった横穴墓3基の内2基は県指定広瀬村古墳の中に入るが、残る1基も未指定とはいえる、同一群のものである。土器田一帯の横穴墓群についての呼称は一

般化されたものはないが、広瀬村古墳

第2表 遺跡所在地一覧表

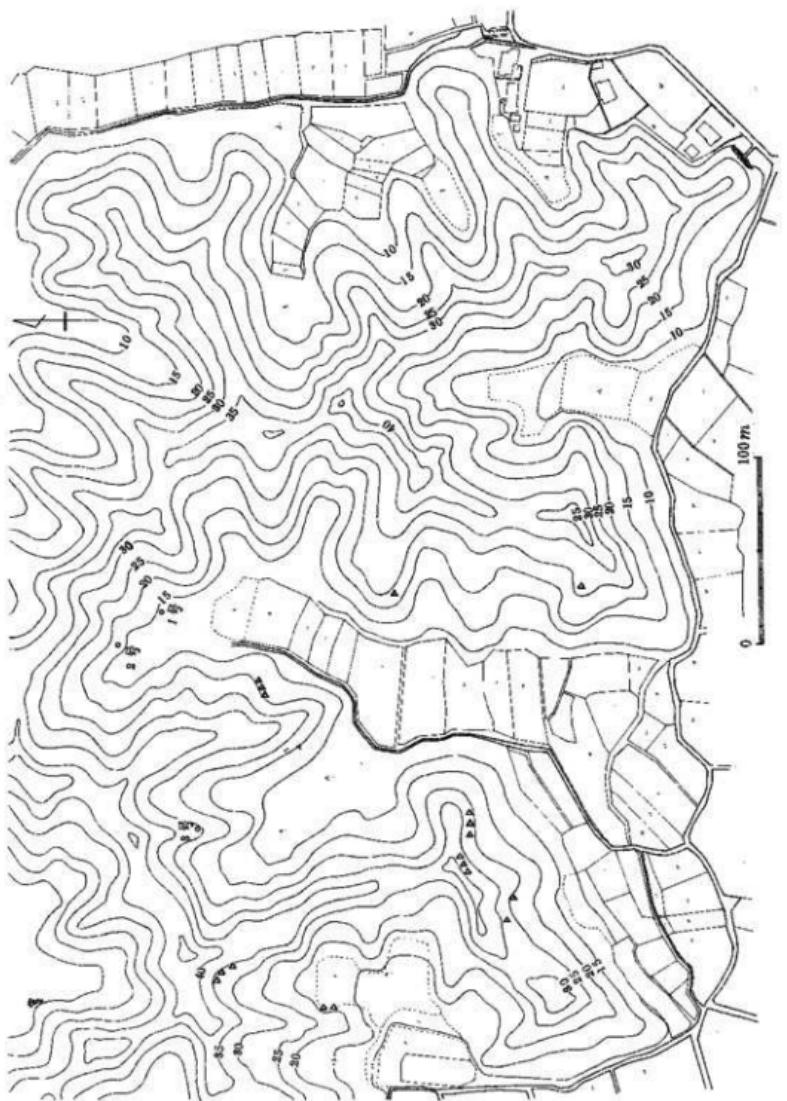
は旧村内古墳を一括しての名称のため古墳群の性格を漠然と把握しているにすぎず、土器田地区に所在する横穴墓については、土器田横穴墓群と呼称する方が適当と考えられる。発掘調査対象の3基の所在地は第2表のとおりである。

番号	所 在 地	標 高(m)
1	佐土原町大字下那珂土器田12783-16	13340
2	〃	1740
3	〃 12797-2	2640

地的には、一ヶ瀬川の右岸に形成された標高約90mの小山地の南端に位置する。この小山地は西の方から東に張り出した形状であるが、小谷を挟みながら南出する三丘陵の中央丘陵南端を中心に土器田横穴墓群が築造されているわけである。南斜面を中心に分布する横穴墓群の南には冲積平野が開け、水田となっているが、ここに県指定広瀬村古墳の円墳が所在している。更に南には県総合農業試験場があり、その南に蛇行しながら佐土原町の中央部を東流する石崎川がある。過去この地域で発掘調査された横穴墓は第3表のとおりである。

第3表 佐土原町内既調査横穴墓一覧表

番号	名 称	所 在 地	出 土 品	調査年月日	文 献
1	県総合農試裏横 穴 第1号	宮崎郡佐土原町大 字下那珂字城ヶ峯	須恵蓋環(2), 土師小坩(1), 刀子 (1), 鉄錐残(1), 貝片(1)	昭和43年10月17日	宮崎県文化財調 査報告書第16集 昭47.3 県教委
2	〃 第2号	〃		昭和43年10月16日	
3	県総合農試裏横 穴古墳 第3号墳	〃	金環(1), 刀(1), 刀子(1), 鉄錐 (十数本), 埴(1), 鏡(1), 鑄(1), 銚(2), 土師器 [坩(1), 漆鉢(1), 蓋(1)], 須恵器 [提瓶(2), 蓋(1), 高环(1), 蓋环(4), 环(8)]	〃	宮崎県文化財調 査報告書第16集 昭47.3 県教委
4	袋住宅団地横穴 古墳	宮崎郡佐土原町大 字下田島20305 番地	なし	昭和44年8月4日	宮崎県文化財調 査報告書第15集 昭45.3 県教委



第2図 横穴墓分布図

III 第1号横穴墓

1. 横穴墓の構造(第3図)

横穴墓は第3紀層の軟質砂岩に掘り込んで構築してあり、前庭部、前羨道部、羨道部、玄室部から成っている。主軸はN 33° Eである。前庭部の広がりは未発掘のため明確でないので全長は測り得ないが、玄室奥から前羨道部端までの長さは約450cmであり、全体を通しての床面はほぼ平らである。

前羨道部は左側で68cm、右側で108cm、幅80cmを測る。羨道部は左側67cm、右側50cm、幅は羨門部で95cm、玄門へ広がり、110cmまでを測る。羨道に天井はないが、前羨道部との境に長さ100cm、幅24cm(中央)、深さ15cmの閉塞施設としての掘り込みがある。玄室の形態は丸みをもった長方形状で長径300cm、短径250cm、天井までの高さは150cmを測り、妻入り型寄棟造りに近い。羨道寄りの天井は剥落が著しいが、中央付近の両壁には継方向の整形痕が良く残存している。

また、玄室の中央部から奥壁までの約150cmの間は径1.5~1.6cm程度の石を敷き詰めている。玄門寄りは石がまばらになっているが開口していた横穴墓であることから盗掘のためにとも考えられる。屍床としての特別な施設は認められなかった。

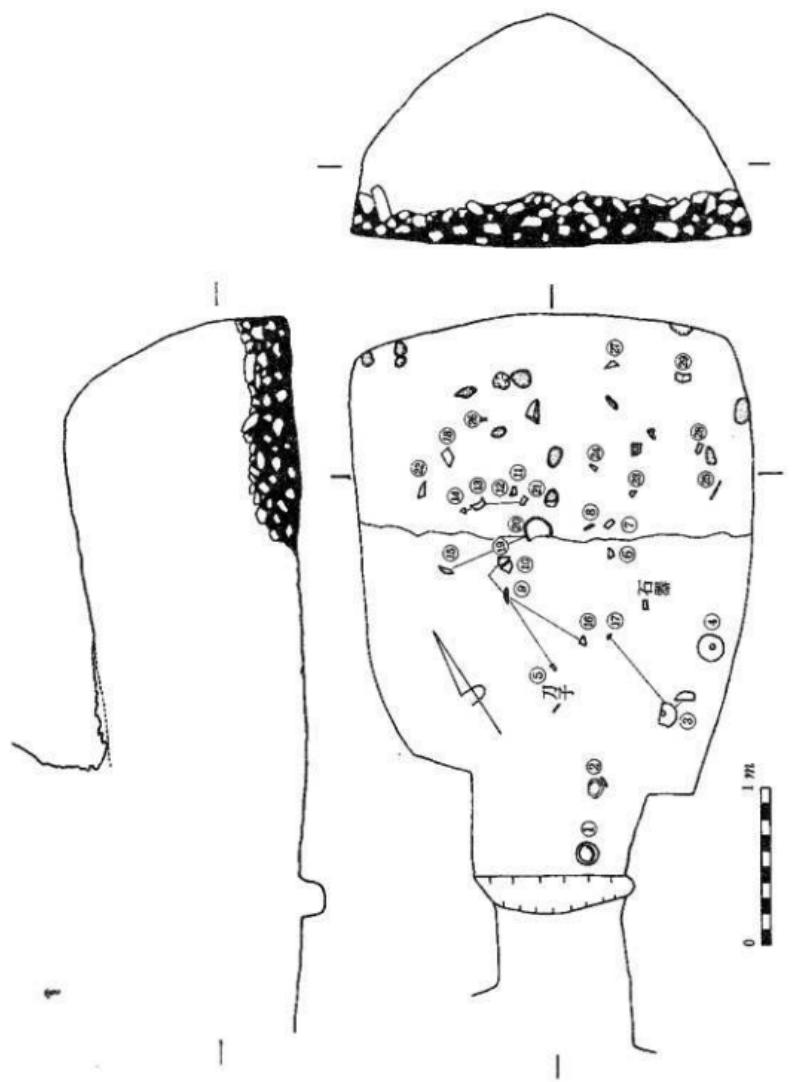
2. 出土遺物(第3図~第7図)

遺物は、羨道の右寄り部分に須恵器の楕(第3図①、第4図9)と高杯(第3図②、第4図8)、玄室の右壁入口寄りに蓋2個(第3図③④、第4図5、4)、中央部に蓋1個(第3図⑩、第4図6)、同じく中央部に6片に割れ、分散した蓋1個体分(第3図⑤⑨⑩⑪、第4図7)、底の欠失した楕1個体分(第3図⑫⑬⑭、第4図10)、その他玄室奥から蓋破片3片(第4図1、2、3)が出土している。また、破碎した須恵器片(毫はか)が25個(接合した結果18個)出土しているが、各々1部が存在したのみで、しかも玄室内全体に散乱した状態で発見された。その他、玄室入口付近から刀子1本(第7図1)、右壁寄りに小型片刃石斧1個(第7図2)が発見された。

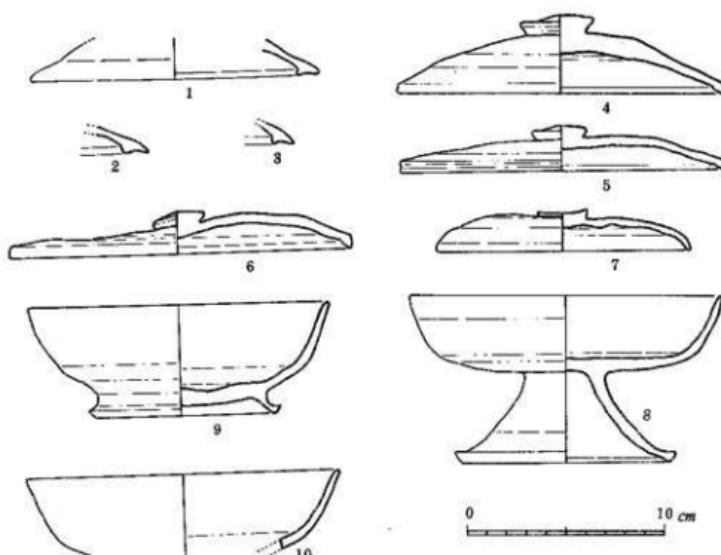
蓋(第4図1~7)

2種に分けられる。

A類・縁辺下に身を受けるためのかえりのあるもの

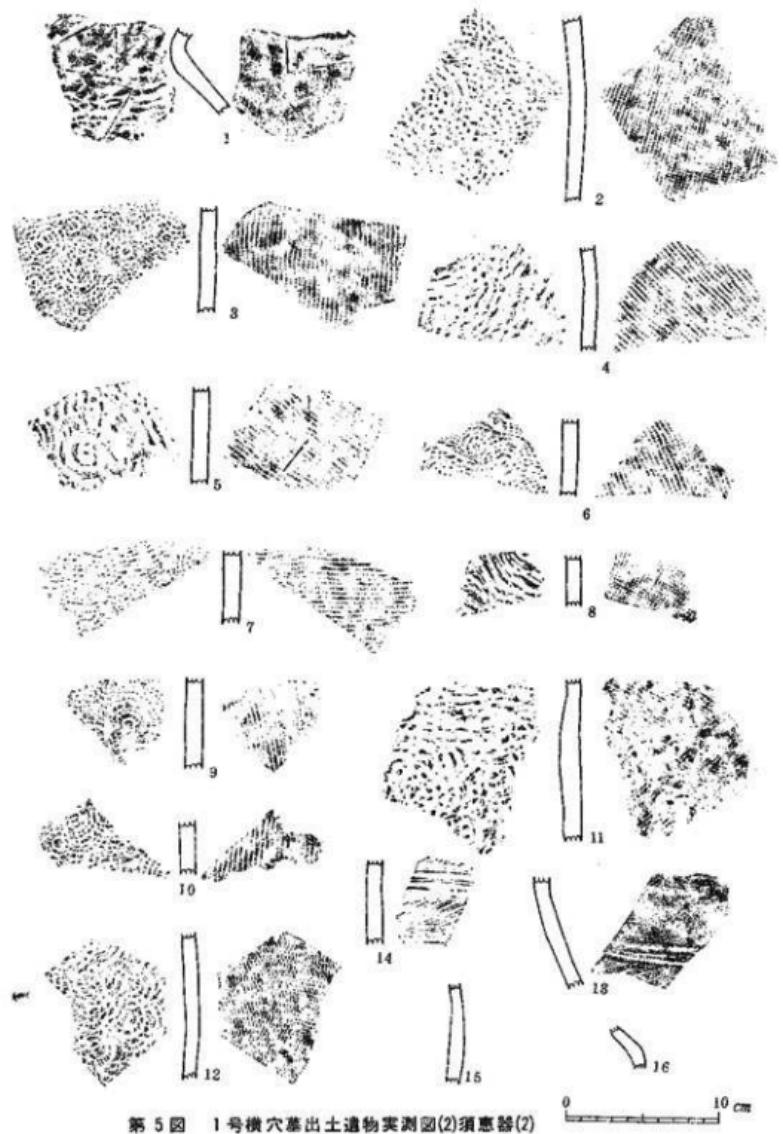


第3図 土器田1号横穴墓実測図



第4図 1号横穴墓出土遺物実測図(1)須恵器(1)

1. 天井部を欠いているが、口径 14.5 cm (推定) を測る。
- 2・3 いずれも小破片であり、1と共に同一個体とも考えられるものである。
- B類・口縁が波せ蓋式になっているもの
4. 口径 16.5 cm、高さ 4.0 cm で頂上に円板状つまみが付いている。口縁は丸く、肥厚している。つまみ上面及び口縁部の一部には自然釉がみられる。天井部は回転ヘラ削り、下半は横ナデである。内面は中央部に縱横方向にナデで仕上げ、端部は横ナデ仕上げである。表面口縁部には小さい二本斜線のヘラ記号がある。
5. 口径 16.5 cm、高さ 2.3 cm、頂部に小さい円板状つまみが付いている。口縁端外側にはくぼみがある。表面は横ナデ、内面中央付近は縱横方向にナデ仕上げの後、「×」のヘラ記号をつけている。内面の周辺は横ナデである。内外面とも器面に対して左回転の調整であることが認められる。
6. 天井部が変形しているが、口径 17.3 cm、高さ 2.1 cm で極めて扁平である。口縁端外側にはわずかにくぼみがみられる。頂部には円板状つまみがある。天井部にはヘラ削り痕が良く残っており、体部は横ナデである。内面は中央部に不定方向のナデ痕がみられ、周辺は横ナデ仕上げである。



第5图 1号横穴墓出土遗物实测图(2)须惠器(2)

7. 小形品で、口径 1.28 cm、高さ 2 cm。頂部の円板状つまみは報な調整である。天井部はヘラ削り、体部は横ナデで器面に対して左回転の調整である。内面中央はわずかにナデがみられ、周辺は横ナデ仕上げである。一部にわずかながら朱の付着がみられる。

高杯(第4図8)

口径 1.58 cm、高さ 8.4 cm の短脚高杯である。杯部の底部内面は不定方向の粗雑なナデ痕が残っている。口縁部は内外面とも横ナデであるが、底部外面はヘラ削りである。脚は変形して重ね焼きの痕跡が残っているが、上下面とも横ナデ調整である。脚端で断面三角形である。

椀(第4図9、10)

9. 著しく外反する付高台を有し、腰部に稜を持ち、やや内渦気味にたちあがり、口縁部に至っている。口径 1.52 cm、高さ 5.6 cm で高台径 9.0 cm である。高台底面は外側にはね上がり、使用による磨滅がみられる。内部底面は不定方向のナデがあり、立ちあがり部分及び外面は横ナデである。

10. 底部を欠くが椀と考えられる。口径 1.58 cm、内外面とも横ナデである。

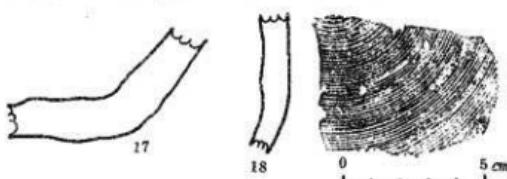
須恵器破片(第5・6図)

完形に復原できるものはないが、甕・壺・提瓶が考えられる。

1から12は表面は平行線叩きで、内面は同心円文叩きであるが、若干の変化がみられる。平行線叩きはほぼ同一方向叩きのもの(1~10)と二方向以上のもの(11, 12)があり、内面の円文は、密で凹部分が鋭角的なもの(3, 6, 7, 9, 10)と粗大なものとがある。また、(1, 5, 9, 10)には表面に、(11)には内外面に自然釉がみられる。

13は壺の肩部とみられ、下方に平行ヘラ条痕二条を施し、その下に斜条痕を入れている。頭部直下に「X」の細線ヘラ記号を付している。14は表面に釉がかかっており、平行沈線間にヘラによる斜条痕を施したもので、黒褐色を呈している。15は内外面ヘラ削りの後、横ナデ仕上げである。16は小破片であるが、壺の肩部とも考えられるもので、内外面とも横ナデである。17は底部で、付台はなくなっているが、指頭により押しなで成形を行ったあとが残っている。表面ヘラ削り、内

面指頭調整で上部は表面横ナ
デ、内面ナデである。18は提
瓶の胴部片とみられ、カキ目
が円状に施されている。内面
には粘土紐巻き上げによる凹



第6図 1号横穴墓出土遺物実測図(3)須恵器(3)

凸がみられ、横ナデ調整仕上げである。

刀子（第7図1）

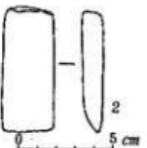
現長8.6cm、身長5.0cm、身幅1.2cm、棟幅0.5cmを測る。

小型片刃石斧（第7図2）

長さ6.5cm、厚さ1.0cm、刃幅2.9cmの石灰岩製仮器である。



1



第7図

1号横穴墓出土遺物実測図

N 第2号横穴墓（第8図）

1. 横穴墓の構造

第1号横穴墓と同じく第3紀層に構築し、前庭部、前羨道部、羨

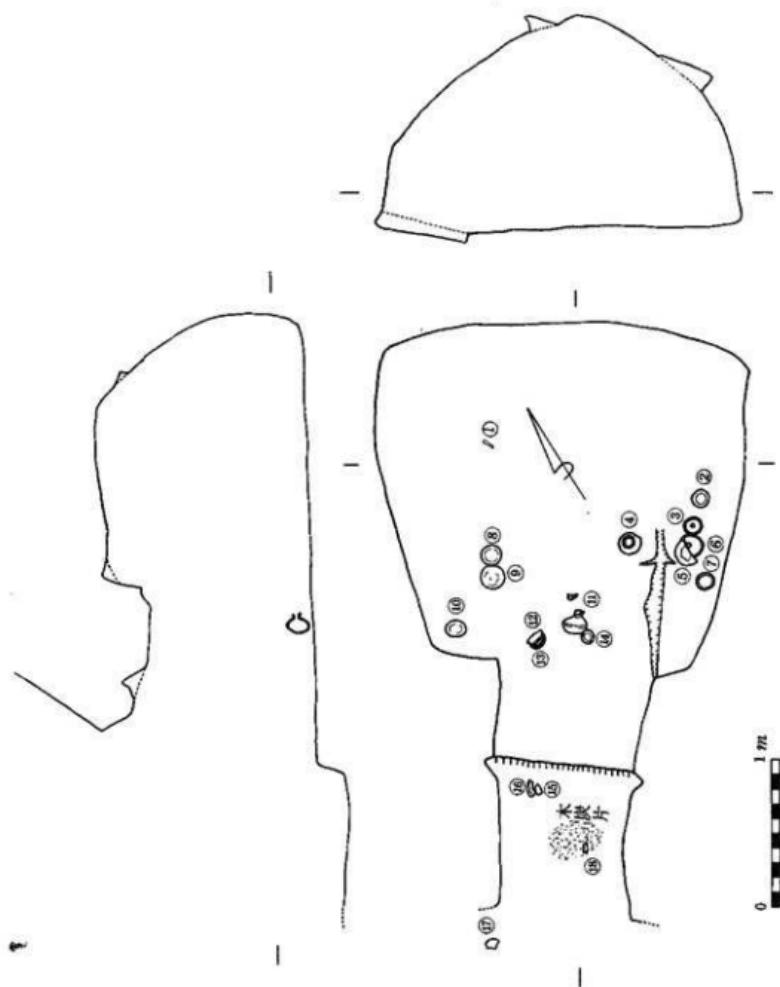
道部、玄室部から成っている。主軸は、N 33° Eである。前庭部の広がりは未発掘のため確認できなかったが、玄室奥から前羨道部端までの長さは約400cmである。床面はほぼ平らに近いが、前羨道部は羨道部より一段低く18cmの段差があり前庭部へ続いている。

前羨道部の長さは左右側とも100cm、幅は中央で83cmを測り、羨道部との境界に左右6cmずつの閉塞用の掘り込みがある。羨道部は前羨道部より一段高く、左側で6.6cm、右側6.5cmの長さを有し、幅は戸門部9.4cm、玄門部10.6cm、中央付近で9.6cmを測る。天井までの高さは、玄門付近で112cmを測る。玄室の形態は、丸みを持った台形状を呈し、長径225cm、短径245cm、天井までの高さは142cmである。妻入り型寄棟形状に近いといえよう。床面には密とは言えないまでも礫敷をしている。また、玄室右寄りに排水用と認められる長さ100cmの溝が入口に向かって掘られている。1号同様、屍床としての施設は認めることができなかった。

2. 出土遺物（第8図～第11図）

遺物は計19点、内訳は須恵器15（蓋5、杯2、碗5、壺1、壊破片2）、土師器3（瓶1、破片2）、刀子1である。

出土状況は、前庭部に壊破片（第8図⑩、第11図1）、前羨道部に壊破片（第8図⑪、第11図2）、左壁寄りに土師器破片2（第8図⑫）・須恵器蓋片1（第8図⑬、第9図3）が位置し、羨道部には存在しなかった。玄室内からは、奥寄りに刀子1（第8図①、第11図3）が発見されたが、他の土器はすべて玄室中央より入口に近く発見された。左壁寄りに



第8図 土器田2号横穴墓実測図

須恵器椀 1 (第8図⑥, 第9図8), 土師器椀 1 (第8図⑨, 第9図13), 須恵器蓋 1 (第8図⑩, 第9図1) の3点, 中央付近に壺 1 (第8図⑪, 第10図1), 梗 2 (第8図⑫⑬, 第9図12, 11), 杯 1 (第8図⑭, 第9図6) の4点, 右壁寄りに壺 3 (第8図⑮⑯, 第9図2, 5, 4), 杯 1 (第8図⑰, 第9図7), 梗 2 (第8図⑲⑳, 第9図9, 10) の6点が発見された。

壺(第9図1~5)

A・B2類に分けられ, A類は身を受けるかえりのあるもの, B類は被せ蓋式のものである。

A類(1~3) 1は口径9.0cm, 高さ2.8cmで, 天井部は粗いヘラ削りである。天井部端に「ナ」のヘラ記号がある。口縁部は内外面とも横ナデである。内面中央は不定方向のナデ仕上げをしている。また巻き上げ成形が観察できる。2は口径9.5cm, 高さ2.8cm, 天井部に調整の良い中央がやや高い円板状つまみを付けている。天井部はヘラ削り, 口縁部および内面は横ナデ仕上げで, 器面全体に亘って器面に対して左回転の仕上げを施している。また, 受け部の幅が広く0.8cmを測る。3は天井部を欠くが, 推定口径9.7cmである。

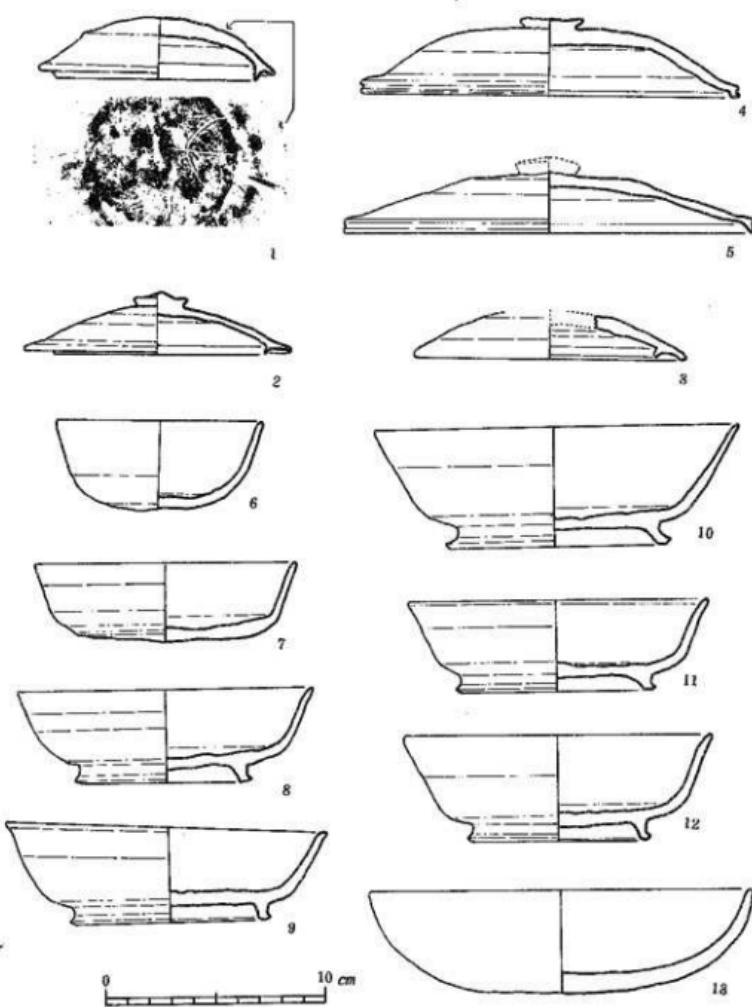
B類(4~5) 4は口径17.0cm, 高さ3.5cmを測り, 頂部に扁平な円板状つまみをついている。天井部はヘラ削りの後, 軽くナデしており, 口縁部は内外面とも横ナデである。内面中央は縦横にナデしている。口縁端には凹みを持つ。器面に対して左回転の調整である。5は焼成が脆く, 灰白色を呈する。推定口径18.3cm, 天井までの高さ2.7cmである。頂部つまみを欠失している。

杯(第9図6~7)

6は小形品で口径9.6cm, 高さ4.0cmを測る。体部は直線的に開き口縁部へ至る。底部はヘラ削りのままで, 体部から口縁部および内面は横ナデ仕上げである。また, 器面に対して左回転の調整である。7は口径12.0cm, 高さ3.6cmを測る。体部はわずかに外反しながら口縁部へ伸びている。底部は平らにヘラ削りを施し, 「木」のヘラ記号が認められ, 内面には巻上げ(左巻き)の状態が明瞭に観察される。

椀(第9図8~12)

●A類(8~9~11~12) いずれも付高台を有し, 右巻きの巻き上げが観察される。腰部が張り, 外反気味に立ち上がり口縁へ至る。口縁端は薄く, 丸めている。底部はヘラ削り, 体部口縁部は横ナデ仕上げである。8は口径13.3cm, 高さ4.2cm, 9は口径14.4cm, 高さ4.3cm, 11は口径13.5cm, 高さ4.2cm, 12は口径13.8cm, 高さ4.8cmを測る。



第9図 2号横穴墓出土遺物実測図(1)

B類(10) 焼成が強く、灰白色を呈している。推定口径16.4cm、高さ5.4cm、腹部からやや直線的に開きながら口縁へ至っている。口縁端は薄く、尖り気味である。

土師器腕(第9図13)

器形は半球形を呈し、底部から口縁部へ器厚を薄くしながら内湾している。口径17.1cm、高さ4.6cm。底に「卑」のヘラ記号をつけている。

壺(第10図)

口縁部を欠失している。口頸部が胴部の一方で片寄った位置に取り付けられている。胴部最大幅16.2cm、胴部高さ9.7cmを測る。

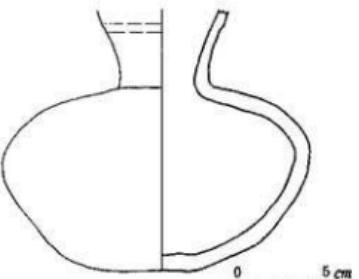
須恵器破片(第11図1・2)

2点の出土で、ともに表面は平行線叩きで、内面は粗い同心円文叩きである。おそらく壺であろう。

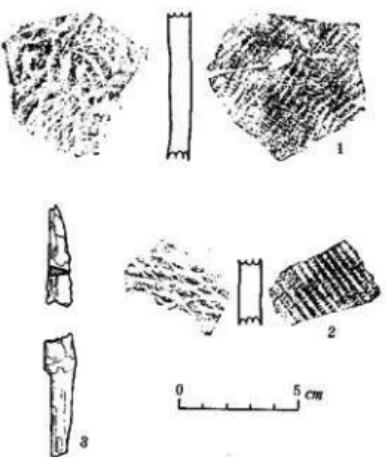
土師器破片 2点出土しているが、小片のうえ風化が著しく器形等不明である。

刀子(第11図3)

2片に折れており、中央部分を欠いている。柱幅0.4cm。



第10図 2号横穴墓出土遺物実測図(2)



第11図 2号横穴墓出土遺物実測図(3)

V 第3号横穴墓

1. 横穴墓の構造(第12図)

3号横穴墓は、今回調査の3基の内、最高所に位置し、最も保存状況が良く、調査に入る段階では羨道口がわずかに開いているのみで、玄室内もほとんど流入土で覆われている状態であった。したがって発掘作業には苦労が伴ったが、擾乱されている事は考えられず、最も期待できた横穴墓であった。

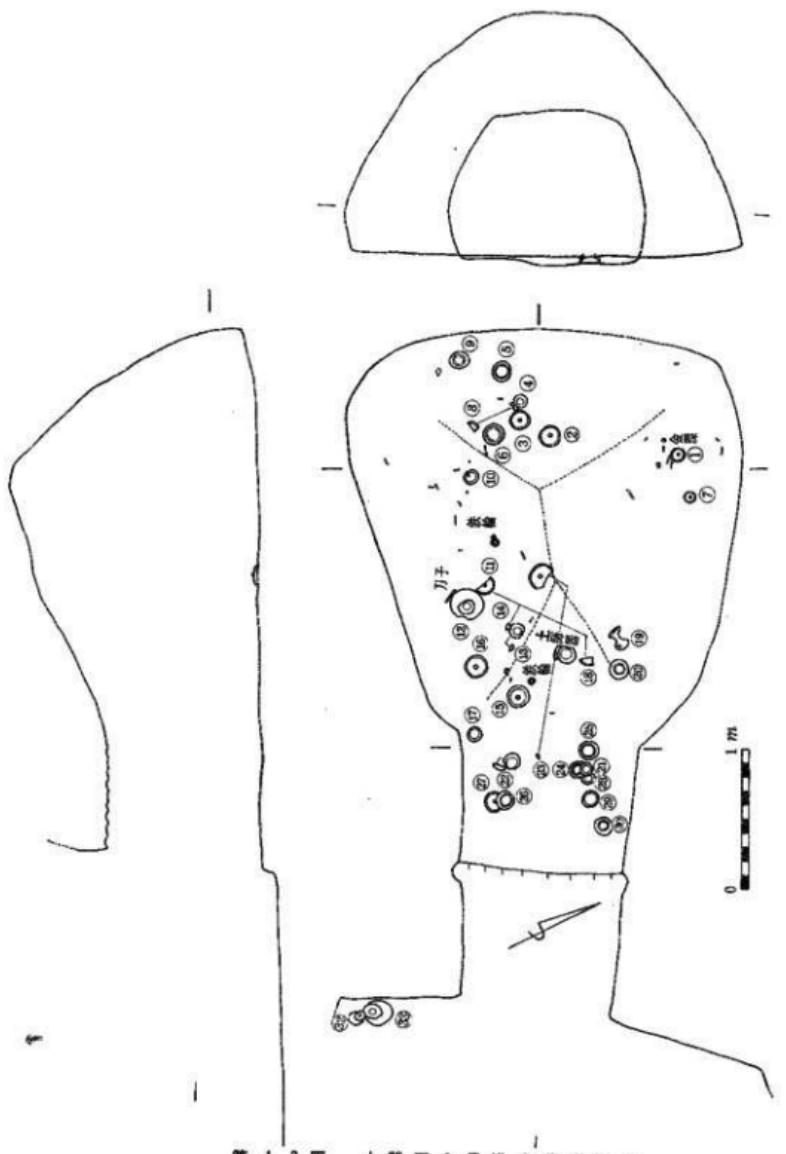
構築している地層は前記の1・2号と同層であり、主軸方位はN 62° W、主軸の長さは玄室奥から前羨道端まで約480cmであった。

前庭部の広がりは一部確認することができ、左方向85cm、右方向110cmの位置まで掘り下げ、前方へ伸びている。前羨道部の長さは左側95cm、右側102cmを測り、幅は110cmである。羨道との境には左右へ5~6cm拡幅した閉塞用の掘り込みがあり、羨道部より一段低く10cmの段差をつけている。羨道部の長さは左側では95cm、右側では90cmを測り、幅は羨門部115cm、玄門部では130cmである。天井は完全な状態で残存しており、横向への工具による調整痕が鮮明である。玄室の形態は丸味のある羽子板形状に近く、長径288cm、短径276cmを測る。羨門から玄室へ至る左右壁への区画は明確ではないが、寄棟の形状を示す屋根の稜線ははっきり認めることができる。棟木に当る部分は玄室のほぼ中央に位置し、主軸方向に66cmの長さを有している。天井の高さは最高175cmである。床面はほぼ平坦であるが、玄室奥は若干上り気味である。また、敷石及び屍床は認められなかった。

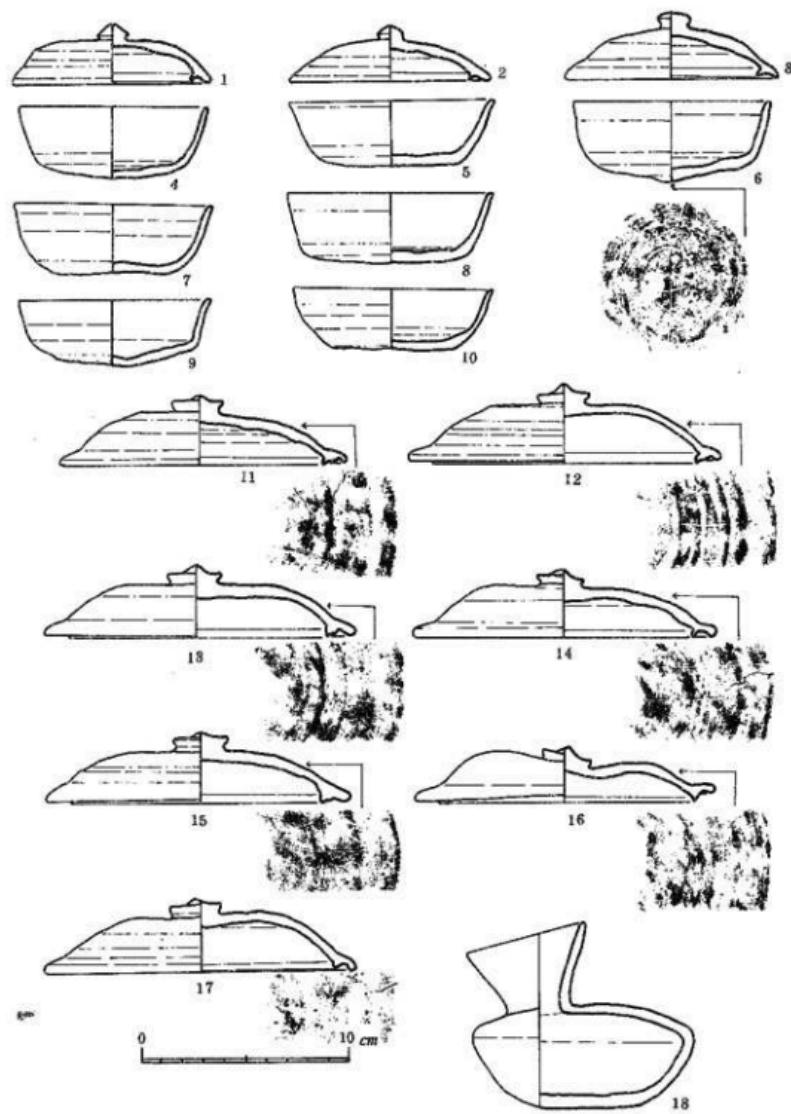
2. 出土遺物(第12図~第16図)

土器は接着復原すると31点、内訳は須恵器30点(蓋10、杯7、椀9、平瓶2、甌1、脚付盤1)土師器(高杯1)、鐵器は刀子1、輸金具2、鐵釘十数本、金環1、以上が出土遺物である。

出土状況は、前庭部左隅に大小2個の平瓶(第12図⑩、第13図18、第14図29)、羨道左寄りに蓋1(第12図⑦、第13図11)、椀2(第12図⑩、第14図19、25)、杯1(第12図⑦、第13図7)、右寄りに蓋1(第12図⑧、第13図3)、椀3(第12図⑩、第14図21、23、22)、杯2(第12図⑩、第13図6、9)、玄室中央入口寄りに蓋4(第12図⑩、⑪+⑫、⑪+⑭+⑯、第13図16、15、12、17)、椀1(第12



第12図 土器田3号横穴墓実測図



第13図 3号横穴墓出土遺物実測図(1)

図參、第14図20), 杯1(第12図②, 第13図4), 梶1(第12図④, 第14図28), 脚付盤1(第12図⑤, 第15図31), 土器高杯(第15図30), 刀子, 輪金具, 鉄釘, 玄室中央右寄りに蓋2(第12図①⑦, 第13図2・1), 金環, 鉄釘, 玄室奥寄りに蓋2(第12図②③, 第13図14, 13), 梶3(第12図⑤⑥⑨, 第14図26, 27, 24), 杯3(第12図④⑧⑩, 第13図5, 10, 8), 鉄釘が位置していた。全体の配置として、羨道部、玄室奥寄りには蓋、梶、杯が所在し、玄室中央入口寄りに器種の異なった遺物が多いといえる。

蓋(第13図1~3, 11~17)

すべてかえりを有するもので、大(11~17)小(1~3)2種に分かれる。

1~3は小形のもので、口径7.6cm(1), 7.5cm(2), 8.3cm(3), 高さ2.9cm(1), 2.7cm(2), 3.2cm(3)を測り、頂部に擬宝珠状つまみがついている。天井部はヘラ削り、口縁部は横ナデ仕上げを施し、表面に対して左回転の調整である。3には表面に部分的に自然軸がかかっている。2の天井部には「II」のヘラ記号が認められる。

11~17は、口径1.11~1.26cm, 高さ3.3~3.8cmの扁平に近いもので、頂部に中央のやや高い円板状つまみがついている。天井部はヘラ削り、口縁部は横ナデ仕上げである。7点ともヘラ記号があり、「I」が3点、「II」が3点、「八」が1点である。調整は器面に対して左回転である。

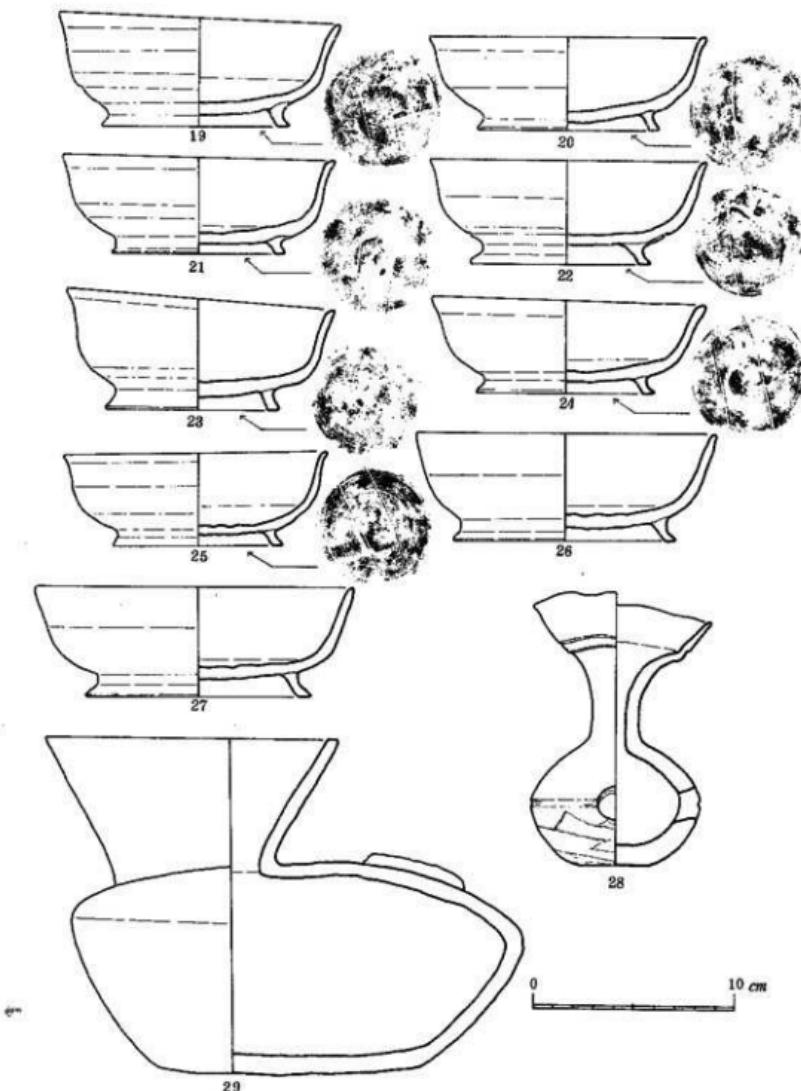
杯(第13図4~10)

A類(5, 10) 底部から内湾しながらだらかに立ち上がり、口縁へ至っている。底部はヘラ削り、体部・口縁部(内・外面)は横ナデ、内面中央はナデしており、巻き上げ成形(右巻き)の状態が観察される。5は口径9.8cm, 高さ3.1cmを測り、10は口径9.4cm, 高さ2.9cmを測る。

B類(4, 6~9) 腹部からやや内湾しながら直線的に立ちあがり、口縁へ至っている。底部はヘラ削り、体部・口縁部(内・外面)は横ナデ、内面中央はナデしており、巻き上げ(右巻き)の状態の観察できるもの(4, 9)がある。6の底面には「X」のヘラ記号がある。口径9.0~10.2cm, 高さ3.2~3.8cm。

梶(第14図19~27)

A類(19, 22, 23) 底面に「I」のヘラ記号を有するもので、著しく外反する付高台を作り、腰部から外反しながら口縁へ至っている。口径13.2~13.8cm, 高さ5.1~5.5cmを測る。底部はヘラ削り、口縁部(内・外面)は横ナデ、内面中央はナデ仕上げである。



B類(20, 21, 24, 25) 底面に「II」のヘラ記号を有するが、器形的には前記のものとほとんど同じである。口径12.5~13.5cm, 高さ4.6~4.8cm。

C類(26, 27) やや大形のもので、焼成悪く脆い。外反する付高台を有し、腹部から直線的に口縁まで至っている。口径14.5~15.5cm, 高さ5.3~5.4cmを測る。26は左巻きの巻き上げ状態が観察できる。玄室奥寄りに所在したものである。

平瓶(第13図18, 第14図29)

18は小形のもので、口頭部はラッパ状に開き、口縁端は丸く仕上げている。体部は扁平で上位に稜を持ち、上部は平坦に近い。底部はヘラ削り、口頭部は内外面とも横ナデ仕上げである。口径5.9cm, 高さ8.8cm, 腹部径1.0cm, 底径約5cmを測る。29は大形で器体の内外面に自然釉がかかっている。口頭部はラッパ状に開き、一条の沈線をめぐらす。口縁端は平坦である。体部は扁平で鏡目に稜を持ち、稜の直上に二条の沈線をめぐらしている。調整技法は、底部はヘラ削りの後、ナデ、体部・口頭部は横ナデ仕上げである。口縁は横円形を呈し、口径は長径14.7cm, 短径12.6cm, 器高16.4cm, 腹部径22.2cm, 底径13.0cmを測る。

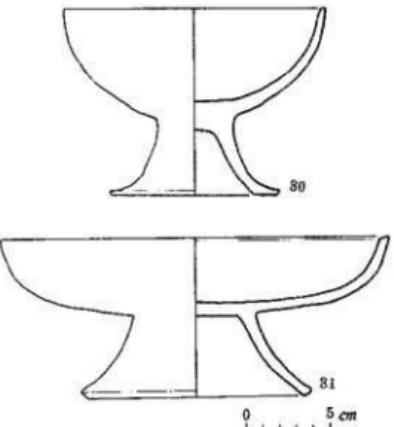
甌(第14図28)

球形状の体部に細くしまった頭部と大きくラッパ状に開く口縁部をつけている。口縁部と口頭部は一条の沈線をもって明瞭な段を有している。口縁部は焼成時の大きな歪みがある。体部の中央に沈線を一条めぐらし、下半はヘラ削り、上部は横ナデ仕上げである。また、口頭部は横ナデである。腹部中央には径1.5cmの穴を穿ち削られた器壁土は内部に入っている。口径約9cm, 器高12.7cm, 腹部径8.7cmを測る。

脚付盤(第15図31)

← 大皿に短いラッパ状の脚を付けたものである。口径23.3cm, 高さ9.5cm, 脚端径12.8cmを測る。焼成脆く器面調整は不明である。灰白色を呈する。

土師器高杯(第15図30)



第15図 3号横穴墓出土物実測図(3)

半球形の杯部に短脚がついたもので、推定口径 1.5 cm、高さ 1.1 cm を測る。焼成は脆い。

刀子(第16図1)

総長 1.00 cm、柄長 5.3 cm、身長 4.7 cm、横幅 0.3 cm。

輪金具(第16図2)

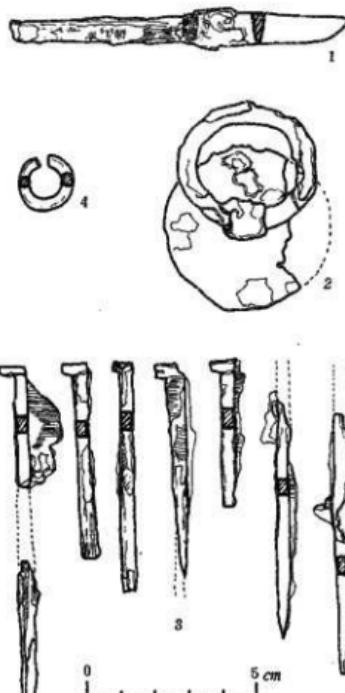
棺付属金具と思われる。直径 4.8 cm の円形鉄板の中央に直径 4 cm の断面円形の鉄輪を止め金具により取り付けたものである。止め金具は幅 1.2 cm の細い鉄帶で、鉄輪を巻き、鉄板の中央を通し、裏側で上下に折り上げている。また、円形鉄板の上下左右に釘(紙)を打ち、棺に打ちつけていたものと考えられる。

鉄釘(第16図3)

木片の付着が見られるところから棺に打ち付けたものと考えられ、十数本出土している。耳は打ち延ばし、直角に折り曲げている。

金環(第16図4)

直径 1.7 cm の円形状のもので、断面はやや扁平であり、0.4 × 0.5 cm を測る。鋼心に金張りをしているものとみえ、部分的に銅錫が表出している。



第16図 3号横穴墓出土遺物実測図(4)

VI 結 語

本県における横穴墓の分布を大きく分けると、五ヶ瀬川、一つ瀬川、大淀川流域に集中的に認められる。県中部以北である。形態的には高千穂地方における「方形プランで室内を障壁様に造り出し、"ヨ"字形に四区分割して複数の埋葬に応じられるようにした肥後型」と、日向中央部に見られる玄室内に何等の施設も持たない寄棟形もしくはドーム形のタイプの2類に分切ることができる。

土器田横穴墓群は、一つ瀬川流域では代表的な大横穴墓群であるが、現在まで正式な調査が行われたことがなく、開口しているもののほとんどは盗掘を受けているものと考えられた。それは、今回発掘調査を行った開口していた2基にも言え、内部の精査の結果でも明らかであった。唯一3号だけは、高所急斜面にあり、わずかに開口していたので、ほとんど埋葬時の状態に近いものであった。今回調査した3基について概略的に述べると下記のとおりである。⁽²⁾構造的には3基とも類似しており、前部、前部、前部、前部、玄室より構成され、妻入型寄棟造の形状をなす。これは、宮崎平野部において大半を占める形状である。出土品は、第4表のとおり、決して多いものとはいえないが、大半が須恵器であり、鉄器では指金具が注目される。

土器群の中にはヘラ記号を有したものが多く、第5表にまとめたが、2号横穴墓出土品に特徴的なヘラ記号が認められる。3号出土品の多くは、椀蓋と、セット関係をなす椀に認められ、ヘラ記号も対応している。

⁽³⁾須恵器編年による限り、3基とも時期的に大きな隔たりは認められず、7世紀末から8世紀前半にかけて構築されたものであろう。

第4表 出土遺物一覧表

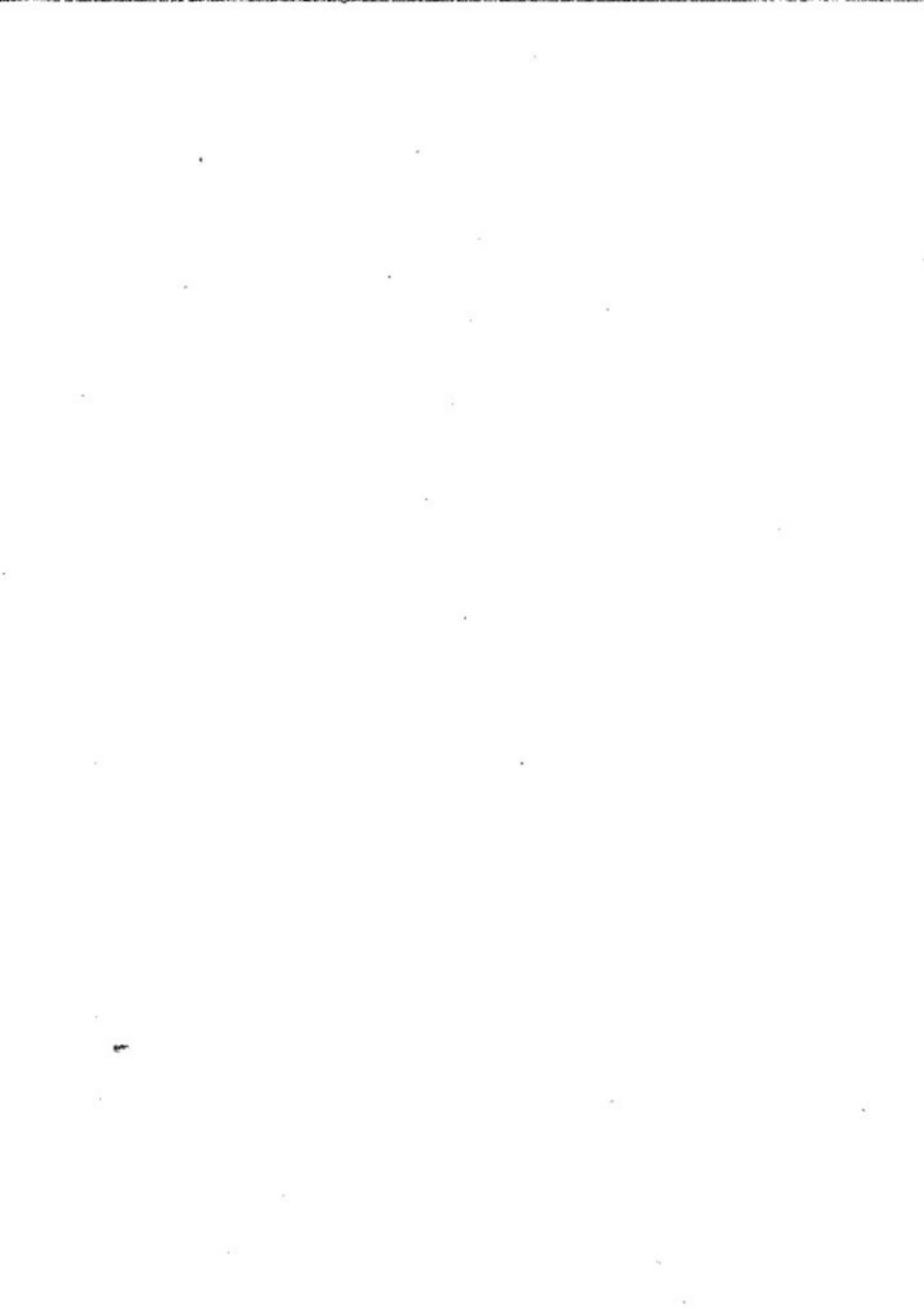
番 号	須 恵 器							土 鍋 器			鐵 器			石 器 小型片 刃石斧		
	蓋	椀	杯	壺	平瓶	甌	高杯	脚付盤	その他	椀	高杯	その他	刀子	輪金	鉄釘	金環
7	2						1		破片 18 (甌, 壺, 提桶)				1			1
5	5	2	1						甌破片 2	1	破片 2	1				
10	9	7		2	1			1			1		1	2	多數	1

第5表 ヘラ記号のある土器一覧表

横穴墓番号	器種	ヘラ記号	線刻場所	図面番号	備考
1	蓋	〃	口縁部端	第4図4	楕蓋・円板状つまみ
	〃	X	内面中央	タ5	
	壺	X	頸部直下	第5図13	肩部破片と思われる。
2	蓋	ナ	天井部端	第9図1	杯蓋
	杯	木	底面	タ7	
	土師器楕	平	〃	タ13	
3	蓋	日	天井部	第13図2	擴宍森状つまみ、小形であり杯蓋と思われる。
	〃	ノ	〃	〃	
	〃	丨	〃	〃	
	〃	丨	〃	タ	楕蓋
	〃	日	〃	タ	
	〃	日	〃	タ	
	〃	八	〃	タ	
	杯	X	底面	第13図6	
	楕	丨	〃	第14図19	
	〃	丨	〃	22	
	〃	丨	〃	23	
	〃	日	〃	20	
	〃	日	〃	21	
	〃	日	〃	24	
	〃	日	〃	25	

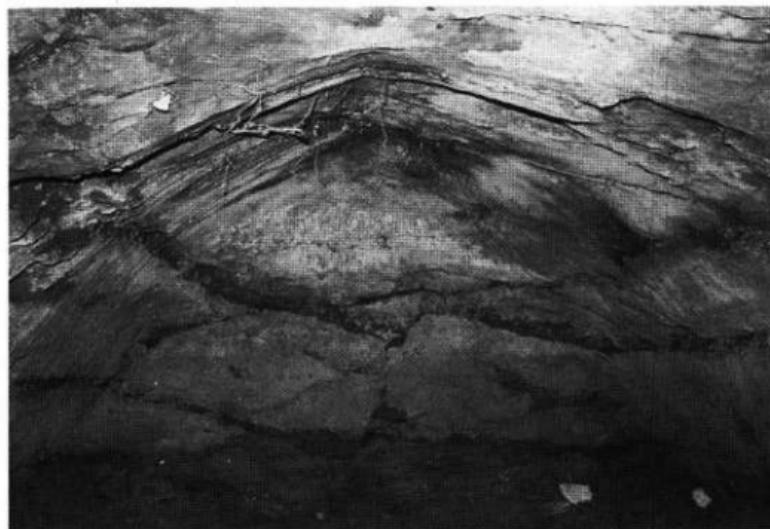
注

- (1) 池上 哲 「横穴墓」P77~78 昭和55年
- (2) 部分名称について、土器田横穴墓群で見られた構造。すなわち羨道部が閉塞造構によって二分されている構造に対し、羨道部と「前羨道部」に分けておきたい。
- (3) 小田富士雄 「天觀寺山墓跡群」北九州市埋蔵文化財調査会 1977年





(1) 梁道から玄室を見る



(2) 玄室天井部

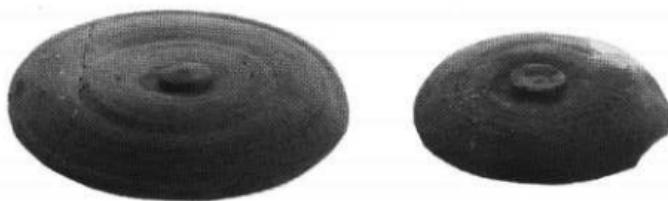


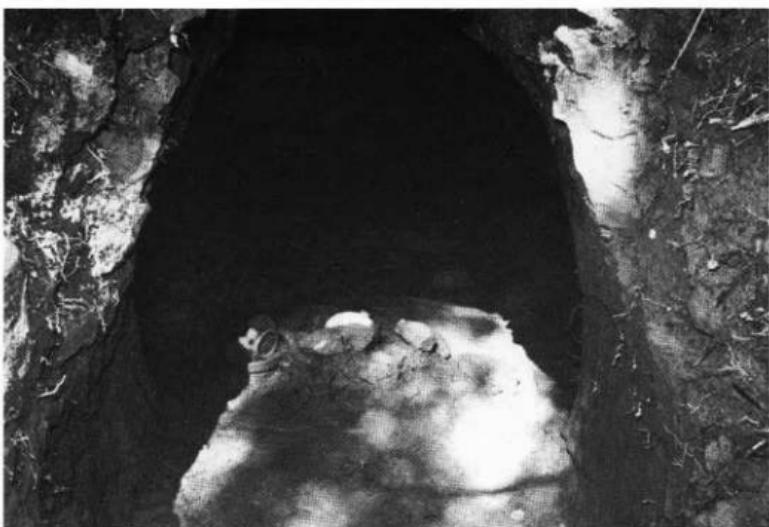
(1) 玄室の状態



(2) 玄室から羨道を見る

图版3 第1号横穴墓遗物





(1) 條道から玄室を見る

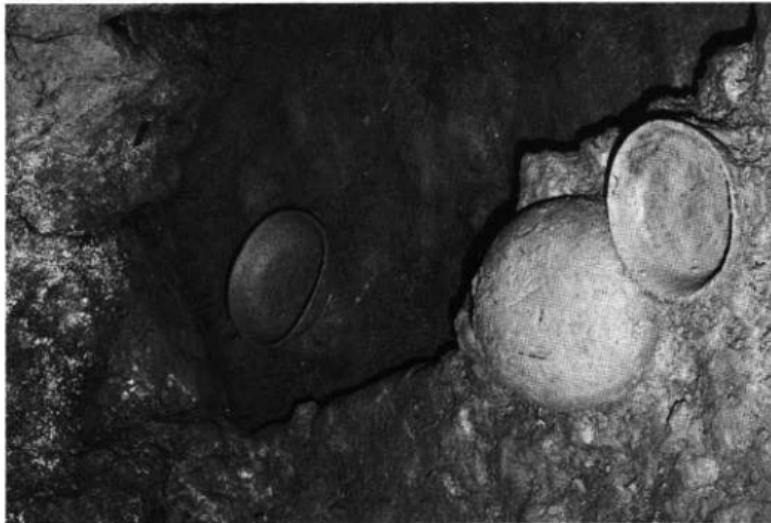


(2) 遺物出土状況

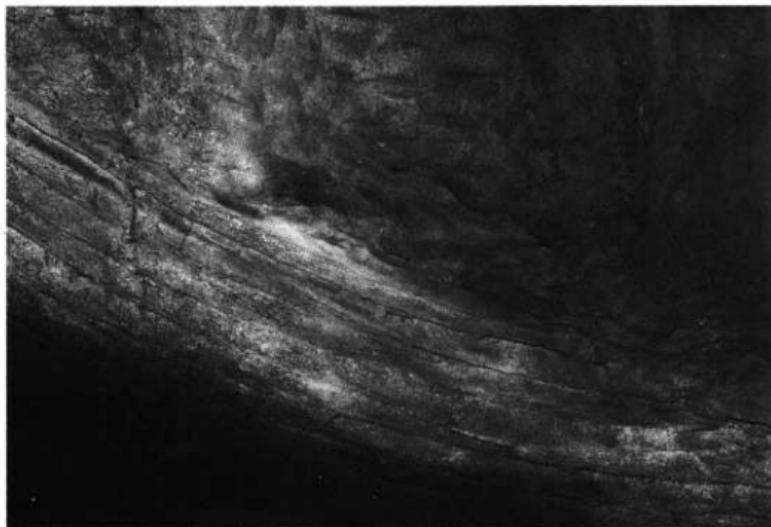
圖版 5 第2号横穴墓遺物出土狀況



图版 6 第2号横穴墓

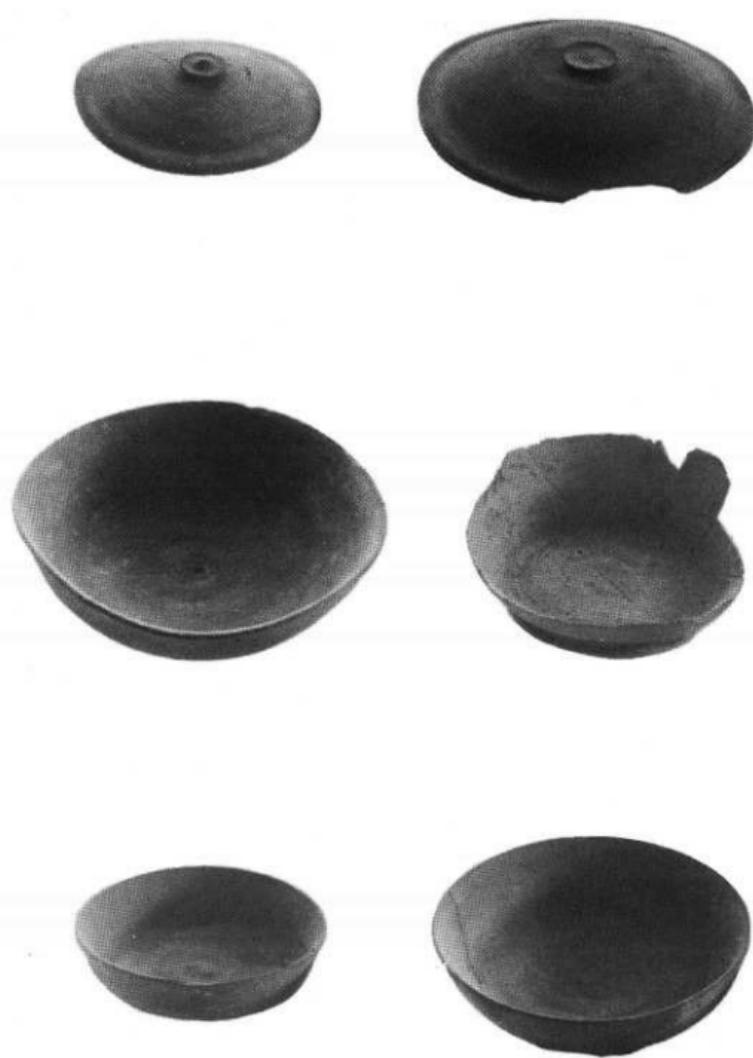


(1) 遗物出土状况



(2) 玄室侧壁

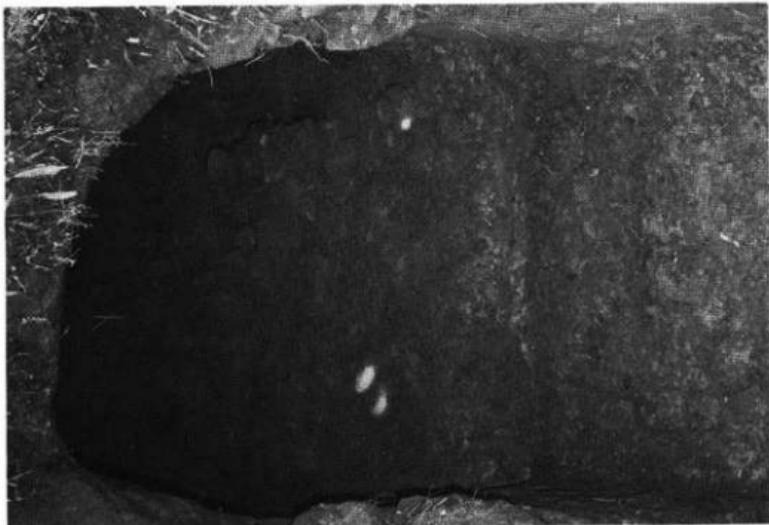
図版7 第2号横穴墓遺物(1)





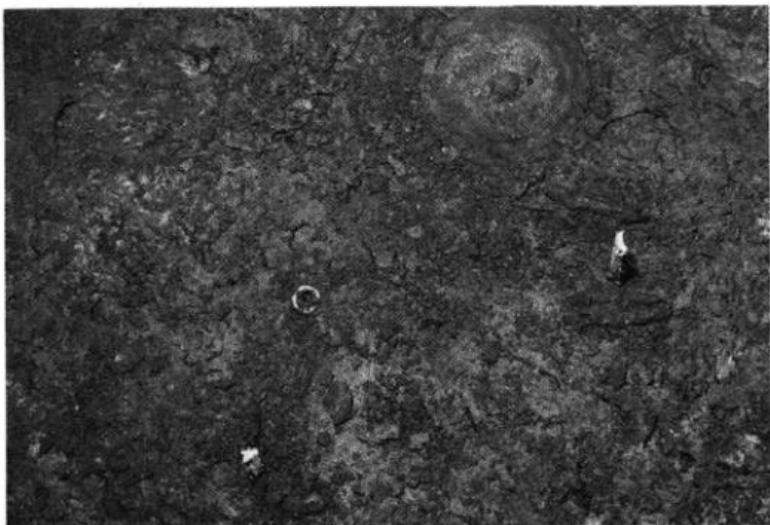


(1) 務道

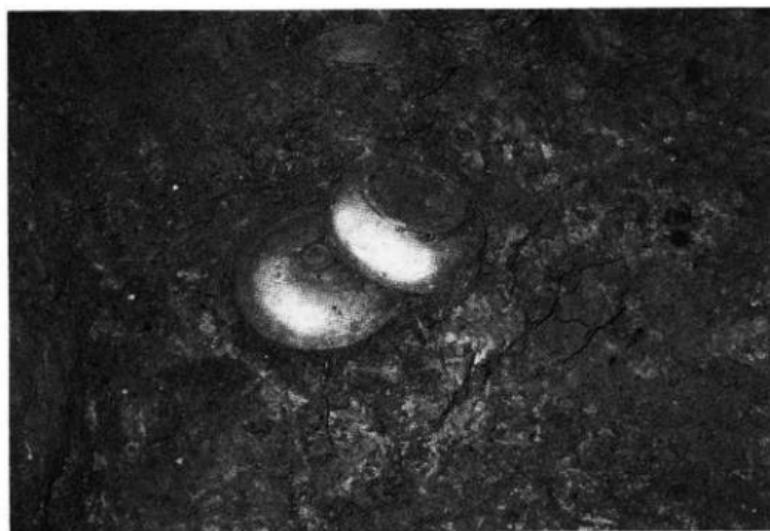


(2) 見るを横穴の號第3号





金 環



圖版 12
第3號橫穴墓遺物出土狀況

